

文するが、意匠は不明である。

7. 布類 (図 128)

1404 は紐。ひと結びしたものが2箇所認められる。1405 は縞の入った布。袖無し羽織等の着物か。
1406 は麻か。縫い合わせ目がある。着物か。

第5節 徳川期以降の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第1面 (図 129、写真図版 28)

第4層とした徳川期の大坂城再築に関わる盛土層の上面である。徳川期から近代に属する遺構を検出した。徳川期の遺構は、主に調査区の南辺及び東辺付近に集中しており、土坑や溝といった比較的深い遺構のみが検出された。徳川期の遺構面自体はある程度削平されているようである。また、見つかった土坑は規模が一辺1mを超すもので、遺物が多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。そのような土坑が南辺や東辺に集中していることから、何らかの区画を示している可能性がある。徳川期には、当地は定番屋敷があったことが絵図から知られ、ここで検出した土坑や溝が屋敷境になる可能性もあろう。確実に徳川期に属する遺構は75・96・97・103・110・1325土坑と109溝、井戸である。他に、近代以降の陸軍関係の建物の基礎と考えられる方形区画をいくつか検出した。

a. 土坑

97土坑 調査区東端で検出した。規模は長辺2.6m、短辺2.4mを測り、平面隅丸方形を成す。深さ1.3mを測る。

埋土から土器・土製品・瓦が出土した(写真図版41:1740~1747)。1740・1741は焼塩壺。外面には「泉渡伊織」の型押しがある。型は同範。内面は布目が残る。1742~1746は土人形。このうち1743は人が乗る象である。1747は軒丸瓦。意匠は不明であるが家紋瓦の可能性がある。

110土坑 調査区東端で検出した。規模は長辺4.5m、短辺2.6mを測り、平面隅丸方形を成す。深さ1.5mを測る。

埋土から土師器・瓦質土器・肥前陶磁器・瀬戸美濃焼・関西系陶器・備前焼・信楽焼・中国産磁器・土製品が出土した(図133~136:1407~1483)。

1407~1411は土師器。1407は土師器皿。1408は焼塩壺の蓋。1409は喫煙用具の火入れ。外面にヘラ状工具による施文がある。口縁部は剥離が見られる。灰を落とす際の敲打によるものか。1410は焼塩壺か。1411は焜炉。体部の穿孔部分に銅線が残っていた。

1412は馬形の土人形。

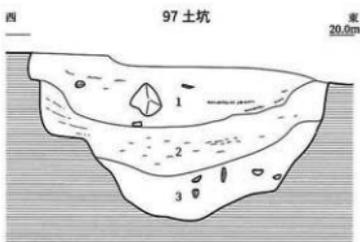
1413~1417は瓦質土器。1413は竈の掛け口の枠か。1414~1417は火鉢。1415は平面形が八角形を呈するもので、底部に四脚が付く。体部中位には花菱文が型押しされる。1416は獣面把手が付くもの。底部に三脚が付く、口縁部に花菱文が型押しされる。1417は外面に「高」字と花文の型押しがあり、別に木の葉形の線刻もある。これらはいわゆる直徳火鉢か。

1418～1425は肥前磁器の蓋。このうち1418～1422は青磁染付の蓋。1419・1420は外面に「丸に剣鳩酸草」の家紋が3箇所に描かれる。内面は見込みに二重圏線に五弁花、口縁に四方禪文が描かれるもので同一意匠のもの。1423・1424は高台内にも絵が描かれるもので、1424は外面に龍宝珠文を描く。1425はつまみが付く蓋で返りがある。

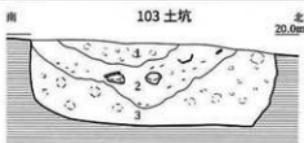
1426は中国産の十錦手の碗。端反り。赤色釉で、丸窓に風景画が描かれ、金彩を施文する。

1427～1449・1462は肥前磁器の碗。このうち1437・1441は青磁染付で、1437の外面には「丸に剣鳩酸草」の家紋が描かれることから、前述の1419・1420の蓋と組み合わせるものであろう。また、1446は過墻龍文を描く碗である（松本2018）。焼き継ぎの痕がある。他に碗は、見込みに太極・五弁花・虫か・松竹梅・草花を描き、高台内には年号や福字の銘款がある。

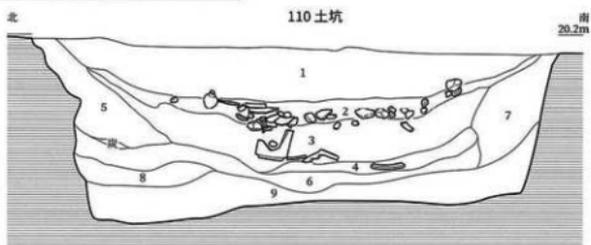
1450は肥前磁器の皿。見込みを蛇の目軸ハギする。1451は肥前磁器の唐草文細頸壺。1452は油壺。1453は紅皿。1454は唐草文御神酒徳利。1455・1456は仏飯器。



1. 2.5Y3/1 黒黒 細砂質シルト（第4層基盤層のブロック若干含む）
2. 10YR5/2 灰黄黒 細砂質シルト（炭化物のブロック含む、第4層基盤層のブロック30%程度含む）
3. 2.5Y7/2 灰黄 中砂～細砂質シルト（第4層基盤層のブロック60%程度含む）



1. 2.5Y7/4 淡黄 細砂～細砂質シルト（第4層基盤層のブロック多く含む）
2. 10YR5/2 灰黄黒 中砂～細砂質シルト（礫含む、炭化物多く含む）
3. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～細砂質シルトに第4層基盤層のブロック30%程度含む）



1. 7.5YR2/3 極暗褐 中細砂質シルトと粘土のブロック土（炭化物多く含む）
2. 10YR2/3 黒黒 中粗砂質シルト（炭化物多く含む、準以下円礫多く含む）
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 中粗砂質シルト（炭化物・50mm以下円礫含む）
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐 中粗砂質シルトと粘土シルトのブロック土（炭化物・30mm以下礫僅かに含む）
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粘土シルトと中粗砂（ブロック状、崩落土?）
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗砂凝結シルト（中細砂・炭化物含む）
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐 中細砂質シルト（粗砂～30mm礫・炭化物含む、崩落土?）
8. 2.5Y4/3 オリーブ褐 中粗砂質シルト（炭化物僅かに含む、ブロック状、崩落土?）
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂凝結シルト（中細砂・炭化物含む、50mm以下礫含む）

0 (1:40) 2m

図130 1区 第1面 97・103・110土坑 断面図

1457・1458は青磁の香炉。肥前か。

1459～1461・1463・1470は瀬戸美濃焼。1459・1460は蓋。1460は1461と組み合う可能性がある。1461は鉢。口縁・見込み・高台周りが露胎。1463は鉢。1470は花瓶か。

1465～1469・1471・1472は関西系陶器。1465・1466は碗。1467は鉢。内面は露胎。見込みに「卜口」の墨書がある。1468は灯明具。1469は皿。見込みは蛇の目軸ハギする。1471は鉄軸がかかる土瓶。1472は鉄釉鍋。

1473・1474は瀬戸美濃焼の鉢か。見込みに円形3箇所の露胎部分がある。

1464・1475は肥前陶器の鉢。1476は瀬戸美濃焼の水甕。

1477～1481は備前焼。1477～1479は徳利。1480・1481は壺。

1482・1483は信楽焼の甕。

これらの遺物は18世紀後葉を主体とするが、一部19世紀に入るものも含まれる点から、18世紀後葉から19世紀初頭に属するものと判断する。

b. 溝

109溝 調査区南端で検出した。東西方向を指向する溝で、検出長約13m、最大幅1.5mを測る。深さは浅いところで0.15m、深いところで0.5mを測る。溝の中央部は幅が広く深い状況であった。溝の西端では肥前磁器鉢(1490)が正置した状態で出土した(写真図版28-7)。

埋土から土師器・肥前陶磁器・瀬戸美濃焼が出土した(図136:1484～1491)。1484・1485は土師器皿。どちらも灯明皿として使用されたものである。1486～1488は肥前磁器の碗。1486・1487は染付碗。1486は端反りで高台内に圈線がある。1488は赤絵碗。1489は瀬戸美濃焼の渡瓶。江浦洋氏による分類のB類に相当し、平瓶形の体部に宝珠形の把手が付くものである〔江浦2009〕。1490は肥前磁器の鉢。見込みに沢瀉を描く。高台内に一重の圈線がある。1491は肥前陶器大皿。高台は断面台形を呈する。これらの遺物は17世紀後葉に属するものと判断する。

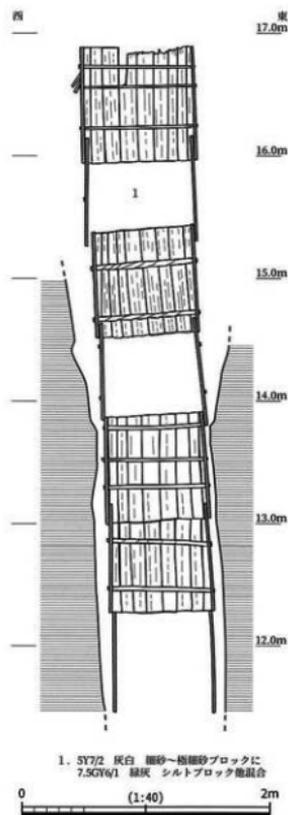


図132 1区 第1面 460 井戸 断面図



图 134 1区 第1面 110土坑 出土器物 2

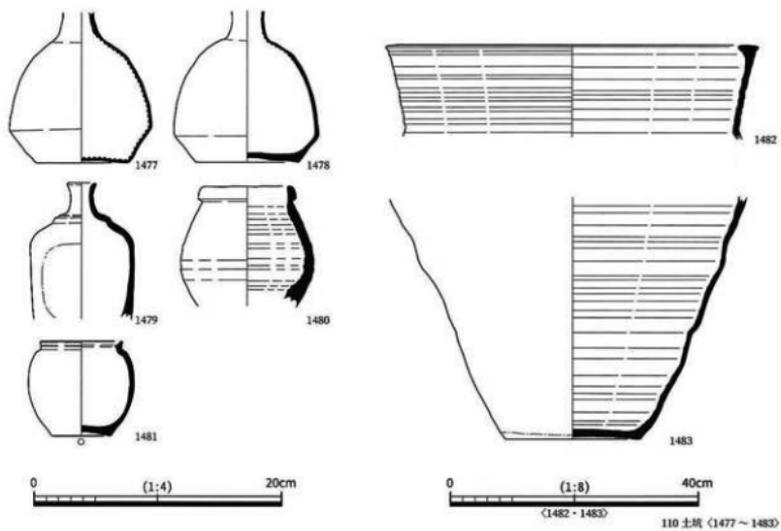


图 136 1 区 第 1 面 110 土坑 出土遗物 4、109 溝 出土遗物

第2面は豊臣後期から徳川初期の遺構面で、三の丸造成に伴い新設されたと考えられる坂路を検出した。

第3・4面は豊臣前期の遺構面で、北西—南東方向を指向する谷内に造られた造成地と建物、溝等の遺構を検出した。

第5・6面は中世以前の遺構面で、谷及び谷の埋没に伴う遺構を検出した。

なお、報告は歴史的な流れに沿って、下から順に古い時代の調査成果から行う。

基本層序

1次機械掘削で現代の盛土・整地土を除去した段階で、すでに徳川期の盛土が露出し、近代の造成土や盛土がほとんど認識できなかった。そのため、当地点ではある程度の削平が成されているものと判断する。周辺の既往調査により、徳川期の盛土を第4層としていることから、1区同様それに倣った。明確な層序としては、第4層から始まる。

第4層：徳川期の大坂城再築に伴う盛土層。当層の上面を第1面として調査した。

第5・6層：徳川期の大坂城再築に伴う盛土層。

第7層：豊臣大坂城三の丸造成に伴う盛土層か。

第8層：豊臣大坂城三の丸造成に伴う盛土層。下半の盛土内から土器や木簡を始めとした木製品、瓦等が多く出土した。

第9層：豊臣前期の整地土層。

第10層：豊臣前期の整地土層。

第11層：作土層か。中世か。

第12層：谷の埋積土。中世。

第13層：谷の埋積土。中世。

第14層：谷の埋積土。中世。瓦器が出土した。

第15層：客土か。古代か。

第16層：谷の埋積土。当層下面検出の落込みから重圍紋軒丸瓦が出土した。古代。

第17層：谷の埋積土。遺物を比較的多く包含する。古代。

第18層：谷の埋積土。遺物を比較的多く包含する。古代。

第2節 中世以前の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第6面(図138、写真図版29)

1524谷を検出した。調査区北端を除く標高17.7m以下において、北西—東南方向を指向し、南に下がる埋没谷を検出した。本来の谷の北肩は豊臣期の段階に加工され、その形状を保っていないか、調査区外になるものと推定する。

谷の規模は、南肩が調査区外になるため全容は確認できないが、後述する3区において、当該谷の南肩口を検出した。直交する位置ではないが、谷の規模を推定すると、幅およそ25mになるものとする。

1492～1505は古墳時代の所産と判断するものである(図140)。1492～1494は土師器。1492は高杯。脚部が中実で、難波型とされるものか。1493・1494は台付鉢。ともに外面に黒斑がある。なお1494は底面に木の葉痕がある。1495は製塩土器。

1496～1499・1505は須恵器。1496は動物の頭部から首にかけての造形物。全体に自然軸がかかる。顔は目と鼻、口を工具で突き刺し表現する。耳の部分は2箇所折損痕跡が認められ、耳とは別のものが造形されていたことが推測できる。それを角と想定すれば、鹿を表現したものとだろう。なお、首の折損部分の角度を見ると、顔が横を向いていた蓋然性が高い。器台に付されたものであろうか。1497は筒形器台の受け部。勾玉形と円形の浮文が付される。1498は杯身。1499・1505は甕。1505は内外面ともに丁寧にナデられるもので、5世紀中葉の所産。1500は埴輪。窰窯焼成の円筒埴輪か。川西編年のIV～V期に位置付けられる。1501～1504は棒状土錘。両端部に穿孔があり、一方の小口に溝がある。古墳時代の遺物は中期から後期に属するものである。

1506～1523は飛鳥時代の所産と判断するものである(図140)。1506～1509は土師器。1506は杯C。内面に放射状の暗文を付し、外面はヘラケズリ調整する。内面には煤が付着する。なお、胎土がチョコレート色をしており、他の土師器と質感が異なる。1507・1508は高杯の杯部。1509は高杯の脚部。1510～1523は須恵器。1510は杯G蓋。1511は杯H。内外面及び破断面に漆が付着する。1512・1513は杯G。底部ヘラ切り未調整。1513は重ね焼きの痕跡が外面に認められる。1514は杯A。1515は鉢。口縁部外面は幅5mm程度の細かいヘラナデをする。1516は高杯。脚部中位に2条凹線を入れる。

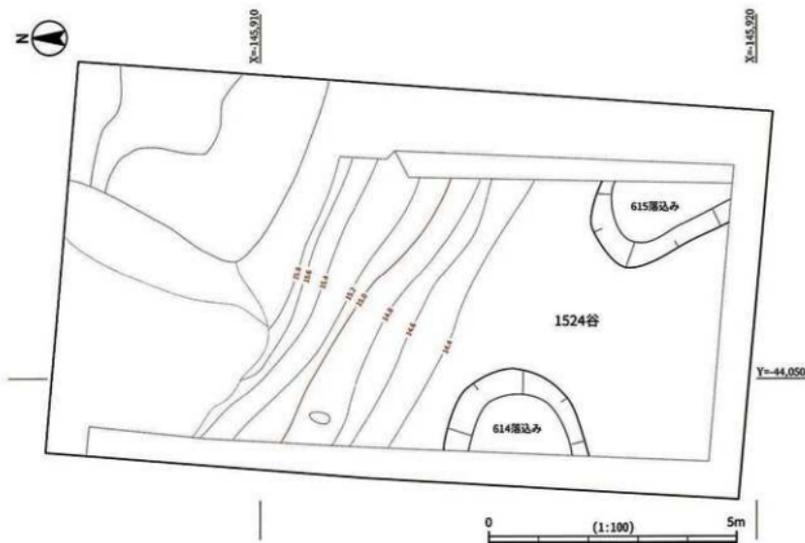


図139 2区 第5面 平面図

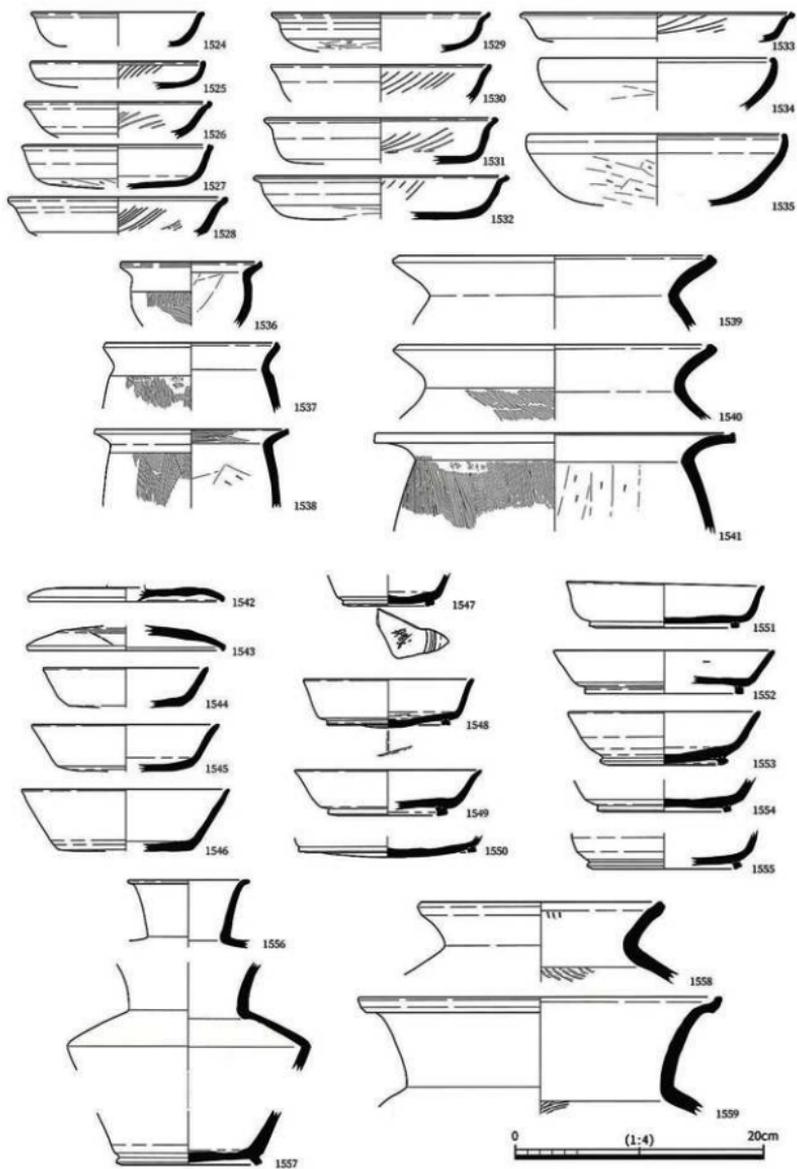


图 141 2区 1524谷 出土遺物 2

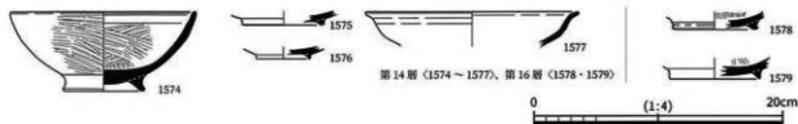


図 143 2区 第14・16層 出土遺物

透かしはない。1517は提瓶か。1518は平瓶。内外面に漆が付着する。1519・1520は長頸壺。1520は内外面及び破断面に漆が付着する。1521～1523は甕。

1524～1559は奈良時代の所産と判断するものである(図141)。1524～1541は土師器。1524は杯C。1525～1532は杯A。ほとんどのものは、内面に斜放射状の暗文が認められる。1533は皿A。1534・1535は鉢Bか。1536～1541は甕。口径の大きさにより、大小2種ある。

1542～1559は須恵器。1542・1543は杯B蓋。1542は内面が一部摩耗していることから、転用碗の可能性ある。1544～1546は杯A。1545は白色と灰色の粘土がマーブル状に混じる胎土である。1547は杯Bか。高台内に「職」と墨書する。平城宮跡(第154次)SD 2700や平城宮跡(第274次)SD 3410に文字の類例がある。なお、器形は壺Eや壺Hの可能性もある。1548～1555は杯B。1548は高台内にへら記号を付す。1555は白色胎土で表面がざらつく。他とは異なる特徴がある。1556は平瓶か。1557は壺Q。外面には自然釉がかかる。肩部に径7cm程度のものを重ね焼きした痕跡がある。1558・1559は甕。1558の口縁部には、ネズミかと思われる小動物の爪痕が、焼成前についたものとして認められる。奈良時代の遺物は、概ね平城Ⅲの時期に比定できようか。後期難波宮に関連するもの可能性がある

1560は埴か。1562～1565は重圏文軒丸瓦。1562は第1・2圏間と第2・3圏間の幅が同じで、第3圏と外縁の幅が狭いものである。また第3圏が他に比べて太くて高い。6018型式に相当するか。1564は第1・2圏間よりも第2・3圏間の幅が広いものである。1565は三重圏文で、中央に「右」字の陽刻がある。第1・2圏間よりも第2・3圏間の幅が広いもので、6013型式に相当するか。1566は重圏文軒平瓦。6573型式A種に相当するか(以上、型式名は佐藤2014に拠る)。

1567～1569は丸瓦。1567は薄い作りで須恵質に焼成されている。1570～1573は平瓦。1570は須恵質焼成。1571は胎土に墨を流したような黒色粒が認められる。1572は凸面に斜格子状のタタキ目が残る。

図143は第14層及び第16層出土遺物である。

1574～1577は第14層出土遺物。1574は黒色土器の椀。内黒。内外面に幅3mm程度のミガキを密に入れる。貼り付けた高台の胎土が体部と異なる。10世紀の所産か。1575・1576は瓦器椀の底部。高台が小さく華奢である。13世紀代の所産か。1577は青磁皿。

1578・1579は第16層出土遺物。1578は両黒の黒色土器で、内面に幅1.5mm前後のミガキを密に入れる。1579は内黒の黒色土器。10～11世紀の所産。

第3節 豊臣前期の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第4面(図144)

第9・10層とした豊臣前期に属する整地土を除去して検出した面である。1区の第8面に比定できる。土坑・溝・ピットを検出した。520土坑は中央に柱が打ち込まれたものである。いずれも第9・10層の下面遺構である。

2. 第3面(図145、写真図版29)

第8層とした豊臣大坂城三の丸造成に伴う盛土を除去して検出した面である。礎石建物が2棟見つかった。1棟は土坑を囲むように礎石が配された建物である。その横には、谷地形に沿うように溝が1条見つかった。また調査区南東隅では、蓆かと思われるものが敷かれた状況が確認できた。

a. 建物

建物21 谷の斜面と462溝に挟まれた場所で検出した。463土坑をコの字に囲むように礎石が配された468～474礎石で構成される建物である。土坑と一体の建物であろう。2間×2間で北西側の妻には間柱がない。平側の礎石の芯々距離は2.0m、妻側の礎石の芯々距離は1.6mを測る。なお、北東隅の470礎石は五輪塔の台石かと思われる石材(1580)で、底部を上にして礎石に転用したものである(図146)。

463土坑は深さ0.5mで、底部に厚さ20cm程度の泥状の堆積物があった。土坑自体は第8層により埋没している。トイレとその覆屋の可能性がある。

建物22 調査区南端で検出した。475～483・508礎石で構成される東西3間以上、南北2間以上になるとと思われる礎石建物である。東西方向の481～483・508礎石は芯々距離で1.5m間隔に礎石が配され、南北方向の476・478・481礎石は柱間が0.9mになるよう配される。また、東端では東西方向に長く蓆かと推定されるものが敷かれた場所を検出した(467蓆敷)。その場所から虫の卵もしくは蛹かと思われるものが多数出土した。

b. 溝

462溝 谷の斜面に平行するように、北西-南東方向を指向する溝。南東から北西方向へ水が流れる。西端でくの字に南西方向へと折れ曲がる。最大幅1.5m、深さ0.4mを測る。なお、東端部分では、平瓦や熨斗瓦が敷かれた状況が確認できた。

埋土から、土器・陶磁器(1581～1587)と木製品(1588)、瓦(1589・1590)が出土した(図146)。1581～1583は土師器。1581は灯明皿。口縁部に油煤が付着する。1582は鍋。1583は大皿。内面に点々と墨か煤が付着する。底面は未調整で、型作りの可能性がある。1584～1586は瀬戸美濃焼。1584・1585は灰釉の皿。見込み露胎。どちらも底部と見込みに輪ドチ痕がある。碁笥底。1586は鉄釉の瓶。内面は頸部中位まで施釉。1587は犬形土製品。1588は木簡。長方形の小型の板材で、片面に何重かの円形の墨書が成されたもの。後述の1623～1626と同様の製品か。

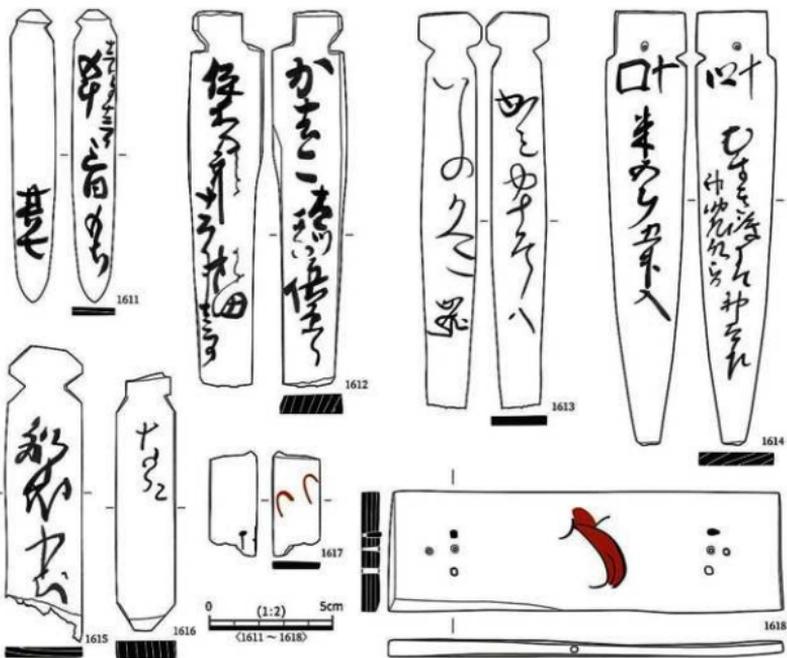
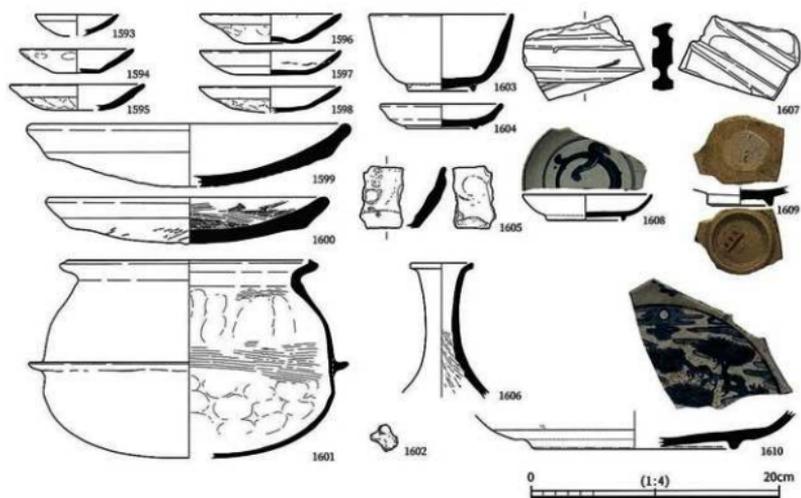
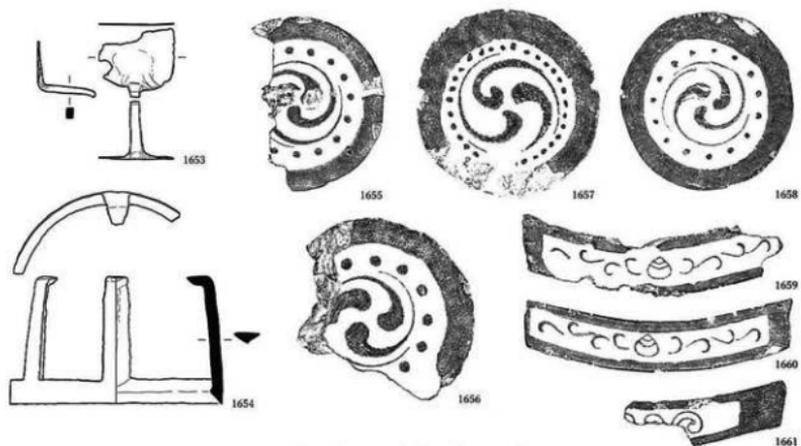


图 147 2区 第8層 出土遺物 1



第8層(1653~1661)、第9層(1662~1670)

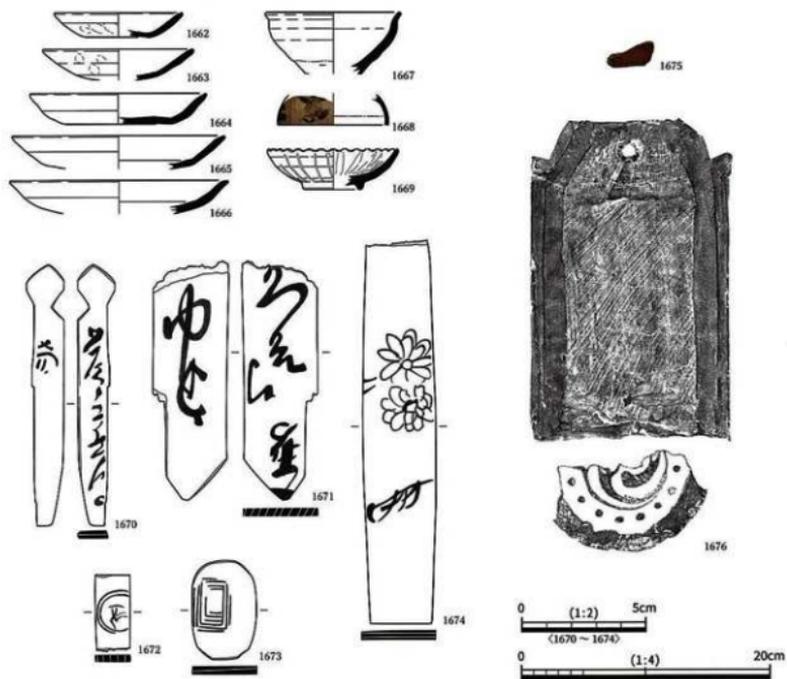


图149 2区 第8層 出土遺物3

1655～1661は瓦。1655・1656は軒平瓦。どちらも左巻きの巴文で、珠文が15～16個ある。1657・1658は鳥雲。1657は右巻きの巴文で珠文が細かく多い。珠文は31個か。1658は左巻きの巴文で珠文は15個。1659～1661は軒平瓦。1659・1660は中心飾りが宝珠で唐草四転。1661は滴水瓦か。中心飾りは向かい合う唐草で、唐草一転。

第9層

1662～1676は第9層出土遺物である(図149)。豊臣前期に属するものである。

1662～1666は土師器。このうち1664～1666は内外面に黒斑が認められるもので、見込み際に圏線状の段が若干つく。胎土及び焼成具合から同窯品と判断する。

1667は瀬戸美濃焼の鉄袖天目碗。

1668・1669は輸入磁器。1668は赤緑の蓋。平面八角形を呈するもので合子の蓋か。1669は青磁の皿。内外面にソギを入れ、口縁を輪花状に加工する。

1670～1674は木簡。1670は荷札で、半身を折損するが上部縁に切り込みを入れ下端を細く加工する。両面に墨書があるが、判読不能である。1671は下端を尖らせた板材で、上部を折損する。右面に「×□殿カまいるカ」、左面に「×ゆ□」と墨書する。1672は長方形の小形の板材で、片面に二重圏線と絵もしくは字を墨書する。1673は小判形の板材で片面に記号かと思われるものを墨書する。第8層出土の1623～1626と同様のものであろう。1674は中央がやや膨らんだ長方形の板材で、片面に菊花を描く。

1675・1676は瓦。1675は金箔軒軒平瓦。金箔は残存していないが、朱漆が残る。1676は軒丸瓦。左巻きの巴文。

第4節 豊臣後期～徳川初期の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第2面(図150、写真図版30)

第4層とした徳川期の大坂城再築に関わる盛土層を除去して検出した面である。当面の状況は、北東部が標高20.0mと高く、南東部が標高18.4mと一段低い。その高低差の間に東西方向の坂路が見つかった。前述したように、当調査区は谷地形の北側肩部及び斜面に当たっており、古代以降、豊臣前期においても高低差のある地形であったことが判明した。豊臣大坂城三の丸を造成する際にもその高低差は解消されず、谷地形が依然として残ることとなった。そこで、上町台地上と谷内の低い場所をつなぐ道として坂路が造成されたものと推測する。また、当調査区内の北東と南東で高さが異なる理由も、当場所が谷であったことに起因する。当調査区においても1区同様、罐壇状の造成が行われたものと考えられる。

488 坂路 調査区中央で東西方向の坂路を検出した(図150)。東が高く、西に低い坂路で斜度およそ15°を測る。路幅は最大4.3mあり、両側に側溝を備えている。調査区内に肩口が認められなかったため、調査区外まで延びることは確実である。しかし、坂路の標高は最も高いところで18.2m、南側の平坦面の標高が18.4mであることから、その高低差を考慮すると、すぐ東側に肩口があると推測する。

当坂路の中央で164溝を検出した。この溝は雨水による浸食によって形成されたものではないかと

考える。なお、坂路の表面には南北方向に波板状の凹凸が認められた。古代においてもこうした凹凸が道路である根拠とされることがある。

当坂路の北側側溝に当たる 159 溝は途中で大きく北へ曲がる。また、坂路の中央で検出した 164 溝も方向をやや北へ向ける。このことを考慮すると、単純にまっすぐ東西に通じる坂路ではなく、途中で北へ方向を変えている可能性がある。谷筋に沿った道へつなぐようにしたものか。

第5節 徳川期以降の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第1面(図151)

第4層とした徳川期の大板城再築に関わる盛土層の上面である。近代に属する遺構を検出した。明治時代以降の陸軍関係の建物の基礎になる可能性がある区画溝を検出したが、その区画溝の中から、年号のある石柱が出土した。

125 溝 調査区中央で、南北方向及び東西方向に折れ曲がるL字の溝を検出した。溝の深さは0.5mを測る。上下二段に拳大～人頭大の礫が入れられていた。1区第1面で検出した溝と同様の構造であることから、陸軍関係の建物の基礎となる溝と判断する。

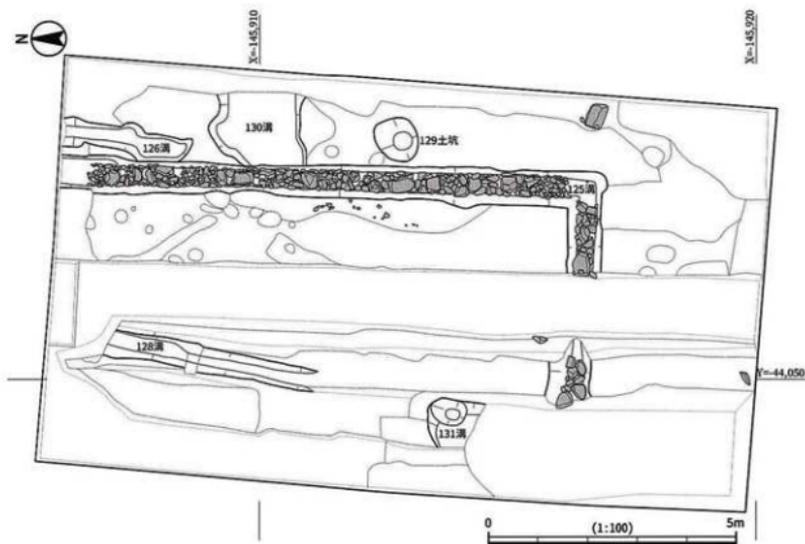


図151 2区 第1面 平面図

第6章 3・4区の調査成果

第1節 概要と基本層序

概要

3・4区は、敷地内の南端に位置する。東西22.3m×南北12.7mのL字形のトレンチである。3区の調査を行った後、4区を追加調査した。また、3区の東半はガソリンの貯蔵タンクがあり、タンクの撤去及び汚染土壌の撤去のために、G.L. - 4 mの地点からしか調査を行っていない。

3・4区では、現地表からおよそ7m下までの掘削を行い、上から順に第1面から第5面までの遺構面の調査を行った。

第1面は徳川期以降の遺構面で、遺存状況はあまり良くなかったが、土坑を検出した。

第2・3面は豊臣前期の遺構面で、調査区西半において南北方向を指向する溝等を検出した。

第4・5面は中世以前の遺構面で、調査区東半において谷及び谷の埋没に伴う遺構を検出した。

なお、報告は歴史的な流れに沿って、下から順に古い時代の調査成果から行う。

基本層序 (図153)

1次機械掘削で現代の盛土・整地土を除去した段階で、すでに徳川期の盛土が露出し、近代の造成土や盛土がほとんど認識できなかった。そのため、当地点ではある程度の削平が成されているものと判断する。周辺の既往調査により、徳川期の盛土を第4層としていることから、1・2区同様それに倣った。明確な層序としては、第4層から始まる。

第4層 (第4-1・4-2層) : 徳川期の大坂城再築に伴う盛土層。当層の上面を第1面として調査し、4区において廃棄土坑を検出した。なお、調査時は第1面の調査終了後、その基盤となる盛土層を徳川期の盛土層と認識し、第4層として一括して掘削したのであるが、その途中で溝があることが判明し部分的に調査を行った。遺物が出土しなかったため時期不明で、調査時は判然としなかった。しかし、報告書作成に当たり1区・2区の調査成果を併せて全体の土層断面を検討したところ、第4層は上下に分離でき得るものとの認識に至った。そこで溝を検出した面を境に上層を第4-1層とし、下層を第4-2層として報告することとする。なお、第4-2層の上面は、今次調査成果を考慮すれば、豊臣後期～徳川初期の遺構面に相当すると考えるのが最も整合的である。すなわち、第4-1層が徳川期の大坂城再築に伴う盛土層、第4-2層が三の丸造成に伴う盛土層、と理解している。

第5層 : 豊臣前期の整地土層か。

ところで、3・4区は西半の地山が高く、徳川期及び豊臣前期の遺構物のみ検出されたことから、それ以前の層は削平されているものと推測する。また、東半は谷部に当たり、2区の土層との対比から層名を付した。なお、当調査区の東半部分にはガソリンスタンドがあり、調査前に貯蔵タンク及び汚染土壌の撤去が行われた関係から、第9層よりも上の層準及び堆積状況は不明である。しかし、2区の堆積状況を鑑みたとき、同じ谷内にあることから、第9層の直上に三の丸造成に伴う盛土があったものと考えられる。

第16・17層：谷の埋積土。遺物を比較的多く包含する。古代か。

第18層：谷の埋積土。遺物を包含する。古代か。

第2節 中世以前の遺構と遺物

第1項 遺構と遺構出土遺物

1. 第5面（図154）

1524谷を検出した。調査区東半において北西－東南方向を指向し、北に下がる埋没谷を検出した。本来の谷の肩は、汚染土撤去により遺存しておらず明らかでない。

谷の規模は、南肩が調査区外になるため全容は確認できないが、前述した2区において、当該谷の北肩口を検出した。直交する位置ではないが、谷の規模を推定すると、幅およそ25mになるものとする。最深部の標高は13.5mであった。谷の底は2区と3区の間になろう。谷斜面の形状は、傾斜角およそ25°である。

図155・156に示したものは、1524谷内の第15層及び第16～18層から出土した遺物である。上位に位置する第15層から古墳時代中期所産の遺物が出土し、最下層に奈良時代の所産となる遺物が包含される等、層序的に整合的な遺物の出土が見られない。そのため一括してここで報告し、大略的な年代推定の指標としたい。

1678～1683は古墳時代前期～中期初頭の所産となる土師器である。第16～18層から出土した。1678～1680は小形丸底壺。1678は体部外面上半を横ハケ調整するものである。1679は体部外面を縦ハケ調整し、内面をケズリ調整する。1680は体部外面を横ミガキ調整するものか。1681は甕。1682は二重口縁壺。頸部内面に横ハケ調整が見られる。1683は複合口縁の甕。体部外面を縦ハケ調整した

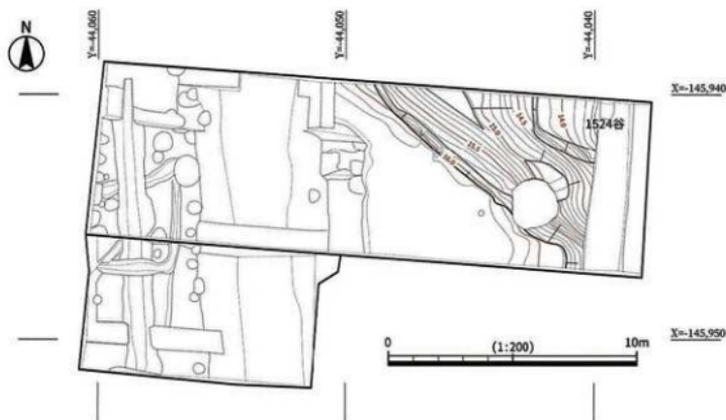


図154 3・4区 第5面 平面図

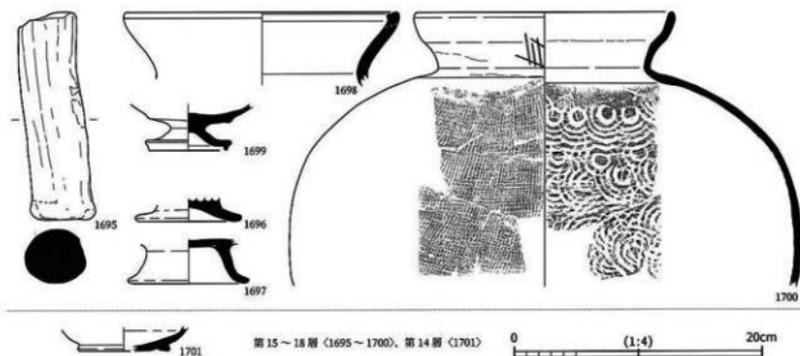


図 156 3区 1524谷 出土遺物 2

に木の葉の文様が残る。1691～1694は須恵器。1691は杯蓋。1692は杯身。1693は甕。1694は長頸壺。難波Ⅱ新段階に相当するものであろう。

1695～1700は飛鳥～奈良時代の所産になるものである。第15～18層から出土した。1695～1697は土師器。1695は脚部である。三脚付きの鍋か。OS87-29次調査のSE503出土の遺物に類例がある(『大坂城跡Ⅶ』図105-74・75〔市文協2003〕)。1696・1697は台付き皿か。1698～1700は須恵器。1698は甕。口縁内面に突帯状のものが巡る。1699は低脚の高杯。1700は甕。頸部外面にヘラ記号を付す。胴部の器壁が薄い。

1701は第14層の緑釉陶器の碗。素地は須恵質。外面から高台畳付まで施釉。高台内は露胎。9世紀後半の所産か。

2. 第4面(図157、写真図版31)

谷部には谷の埋積土が累重しているが、そのうち、第15層とした層中で礫群を検出した。

1527集石遺構 出土状況からは、第16・17層上面にのるように見える(図153)。礫は人頭大の大きさで、谷の斜面でまとまって見つかった(図157)。礫の出土状況は、面を揃えたり目地を詰めたりといった状況ではなく、部分的にまとまりを見せるものである。そのため、礫群は葺かれたようなものではなく、谷の斜面に投棄されたものとする。礫は30個体出土した。

これらの礫を大阪市教育委員会の小倉徹也氏に石材鑑定していただいたところ、すべて花崗岩であった。詳細は、以下の通りである。

- ①桃色のカリ長石が目立つ粗粒黒雲母花崗岩・・・25個体
- ②粗粒黒雲母花崗岩・・・1個体
- ③桃色のカリ長石が目立つ優白質な花崗岩と桃色のカリ長石が目立つ粗粒黒雲母花崗岩の接触部・・・1個体

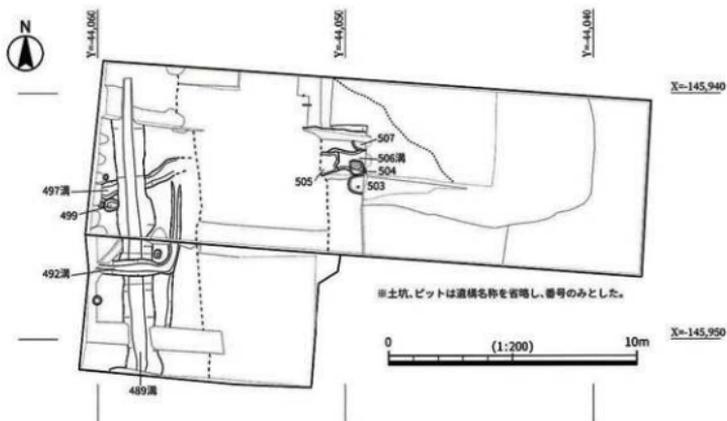


図 158 3・4区 第3面 平面図

1703～1708は軒丸瓦。文様構成は大きく2種に分類できる。1703～1706は左巻きの巴文で外区に珠文帯があり、内区の巴文を一重の圏線で区画するものである。珠文は18個である。同範の可能性がある。1707・1708は右巻きの巴文で外区に珠文帯があり、巴の尾が互いに接しないものである。珠文が細かく多い。珠文は31～32個か。同じ場所で珠文の一つに範傷が認められることから同範である。2区第8層出土の1657も同範の可能性がある。鳥舎で範傷が認められる箇所が欠損するが、珠文数及び巴の具合が近似する。

1709～1722は軒平瓦。5種の文様構成が確認できた。中心飾りの明らかなものは3種あり、いずれも三葉のものである。1709～1713は中心飾りが三葉で唐草三転のものである。なお、1709は隅瓦。1714は中心飾りが三葉で唐草二転以上のものである。1715は中心飾りが不明であるが、唐草が転じず一方方向に並ぶものである。1716は中心飾りが不明であるが、唐草が一転以上のものである。1717～1722は中心飾りが三葉で唐草三転のものである。なお、一番外側の唐草は同じ方向に並ぶものである。

2. 第2面

調査区の東半は、ガソリンスタンドに伴う貯蔵タンク及び汚染土壌の撤去が行われた関係から遺存していない。西半のみ遺構が確認できた。南北方向を指向する大溝が見つかった。三の丸造成に伴う盛土により埋められていると推定されることから、豊臣前期に属するものと考えられるが、これまでに知られていない大溝である(図160)。

a. 大溝

465大溝 調査区西半において検出した(図160)。南北方向を指向する大溝である。幅5.3m、深さ2m前後を測る。断面形が逆台形を成しており、底に泥等の堆積物があまり認められなかったことか

b. 土坑

495土坑 調査区西半で検出した(図159)。規模は長径0.8m、短径0.7mを測り、平面不整形円形

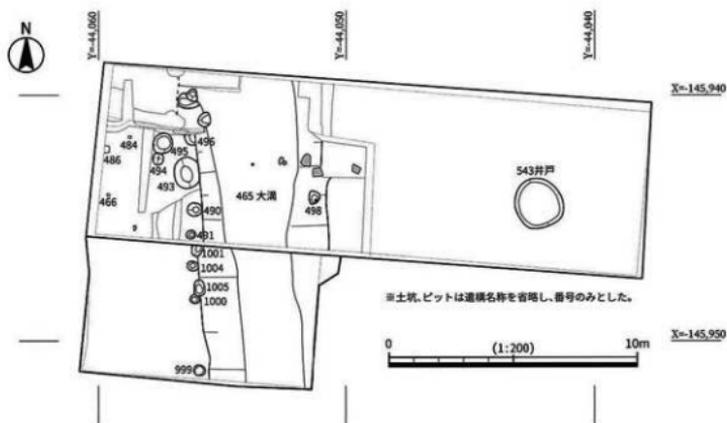


図160 3・4区 第2面 平面図

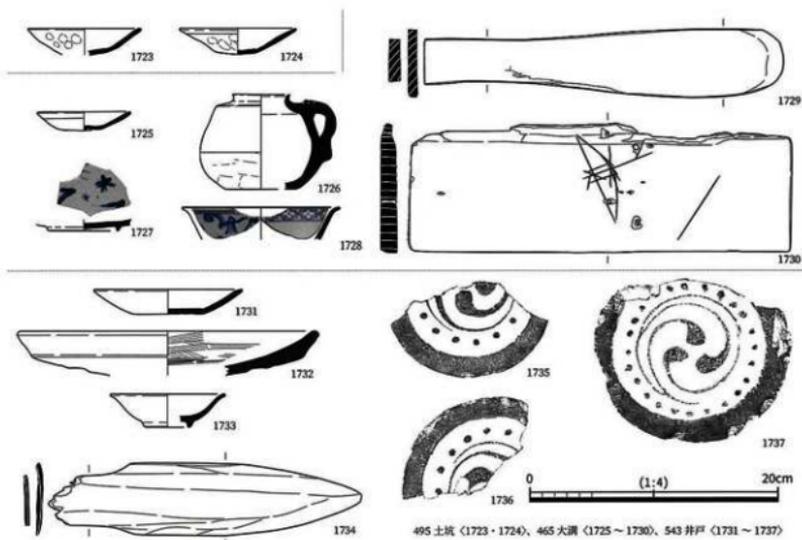


図161 3・4区 第2面 495土坑, 465大溝, 543井戸 出土遺物

面からの深さ1mを測る。

埋土から土器・陶磁器（1748～1801）、土製品（1802～1850）がまとめて出土した（写真3・4）。いずれも写真のみの掲載となる。

1748は肥前陶器の大皿。1749・1754は関西系陶器の急須。鉄軸。1750は瀬戸美濃焼の水甕。1751・1752は土師器焙烙。1753は関西系陶器の急須。白濁釉に緑彩の軸がかかる。1755は土師器の十能。1756は植木鉢。底部に刻印がある。1757～1766は軟質施釉陶器の皿。灯明皿。内面に突帯があるものとないものがある。1770は瀬戸美濃焼の碗。いわゆる鎧手茶碗。1773は関西系陶器の碗。外面に「まいこ□□□」の文字と松が描かれる。舞子焼の可能性がある。1774は瀬戸美濃焼の皿。1778は関西系陶器の鍋。1783は瀬戸美濃焼の碗か。1784は輸入磁器の皿。内面に型押しした文様がある。中国産。1785は関西系陶器の皿か。内面に朱が付着する。1790は紅皿。1793は関西系陶器の皿か。1796は関西系陶器の碗か。1797は瀬戸美濃焼の碗か。1798は瀬戸美濃焼の碗。1799・1800は関西系陶器の碗。いわゆる小杉碗である。上記以外は肥前磁器である。肥前磁器は、広東碗・筒形碗・皿・油壺・仏飯器・御神酒徳利等がある。1801の大皿には焼き継ぎがある。

土製品は、いずれも遊び道具である。人形・ままごと道具・箱庭道具・泥面子に分類されるものである。

人形は天神や神仏、動物がある。動物には、馬（1813～1815）・牛（1818・1819・1823・1824）・緑釉のかかる犬（1816）・鳥（1817）がある。このうち、1823の牛をかたどったものは中に玉が入っており、振ると音がすることから土鈴と考えられる。

ままごと道具は、施釉された徳利（1805・1806）・搦鉢（1807）・鉢（1802～1804）・蓋（1840）・米俵（1841）・野菜（1839）がある。

箱庭道具は、城郭（1844・1845）・灯籠（1842・1843・1847～1849）・塔（1846）がある。

泥面子は芥子面・面打がある。

なお、1820・1821は備前焼の匙と考えられる。

これらの遺物は18世紀末～19世紀初頭に属するものと判断する。

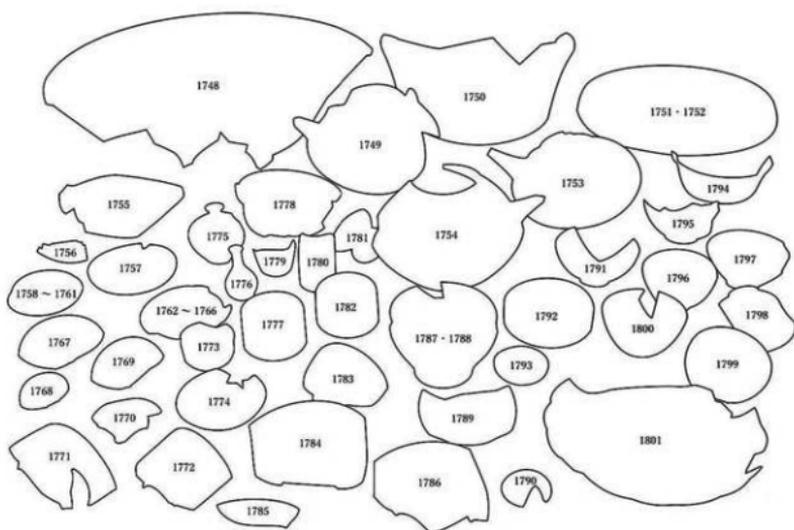


图 163 写真3 遺物番号

第2節 大坂城跡18-1次調査出土貝類の同定と分析

池田 研 (南国市教育委員会)

ここでは大坂城跡(18-1次調査)で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑(吉良哲明 1954)を利用しており、個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多数の方を原則として採用している。

表2 出土貝類種名一覧

| | |
|--------|--|
| 腹足綱 | Gastropoda |
| アワビ属 | <i>Haliotis</i> sp. indet. |
| サザエ | <i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander |
| ツメタガイ | <i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (Roeding) |
| アカニシ | <i>Rapana thomasi</i> (Crosse) |
| バイ | <i>Babyronia japonica</i> (Reeve) |
| テングニシ | <i>Pugilina (Hemifusus) ternatana</i> (Gmelin) |
| 二枚貝綱 | Bivalvia |
| ハイガイ | <i>Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis</i> Schenck et Reinhart |
| フネガイ科 | Arcidae gen. et sp. indet. |
| イタヤガイ | <i>Pecten (Notovola) albicans</i> (Schroeter) |
| イタボガキ | <i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke |
| マガキ | <i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg) |
| ハマグリ | <i>Meretrix lusoria</i> (Roeding) |
| ヤマトシジミ | <i>Corbicula japonica</i> Prime |
| イシガイ科 | Unionidae gen. et sp. indet. |

本調査では古代から近代にかけての遺構・包含層から14種247個体の貝類が出土した(表2・3、写真5)。時期別ではその9割近くが豊臣前期に属することから、以下では当該時期の資料の内容について検討してみたい。

豊臣前期の遺構・包含層から出土した資料は11種221個体で、遺構1149土坑(56個体)を除くと、各遺構の出土量は総じて僅少である。貝種構成に関しては、アカニシ(44.3%)とハマグリ(38.5%)の比率が高く、サザエ(6.3%)、マガキ(5.9%)、ツメタガイ(2.7%)等が続く。いずれも食用となりうるもので、生息域別では鹹水性種が大半を占め、汽水性種(ヤマトシジミ)や淡水性種(イシガイ科)は僅かである。

一方、貝種別に見てみると、アカニシやツメタガイには多くの個体に挟りや孔等調理痕と見られる人為的損傷(池田2006)が観察された。最も出土量の多いアカニシは、殻高計測値が110~130mmの大型の個体が主体をなしている。イタヤガイは右殻が出土しているが、貝杓子に加工されているかどうか

池田研 2013 「難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW12-4) 出土の貝類」:『難波宮址の研究 第十九』、pp.140-142

池田研 2016 「大坂城跡 (14-2 調査) 出土の貝類」:大阪府文化財センター編『大坂城址 7』、pp.223-224

吉良哲明 1954 『原色日本貝類図鑑』保育社

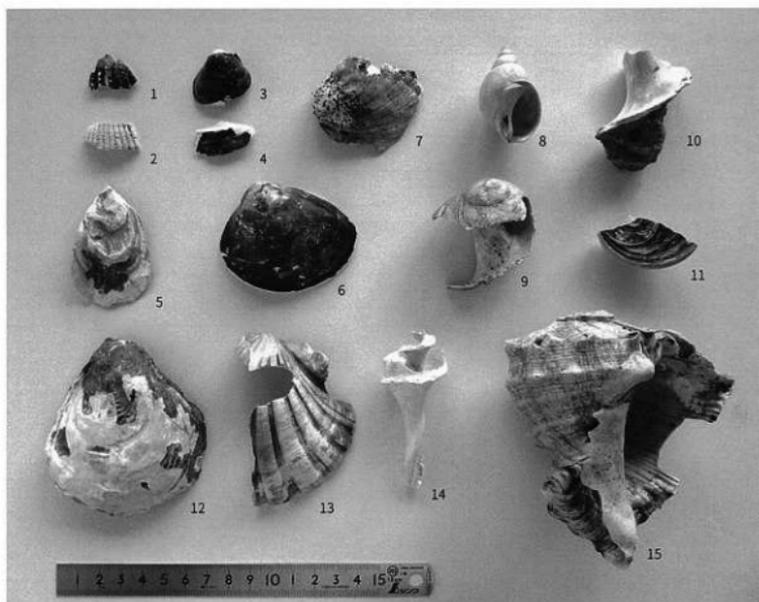


写真5 出土貝類

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. ハイガイ R498 1区第7層 | 9. ツメタガイ R1763 1区1149土坑 |
| 2. フネガイ科 R1767 1区1149土坑 | 10. サザエ R1431 1区801土坑 |
| 3. ヤマトシジミ (R) R404 1区第7層 | 11. サザエ (蓋) R1431 1区801土坑 |
| 4. イシガイ科 R1767 1区1149土坑 | 12. イタボガキ? (R) R1361 1区第10層 |
| 5. マガキ (R) R433 2区第9層 | 13. イタヤガイ (R) R1431 1区801土坑 |
| 6. ハマグリ (L) R1431 1区801土坑 | 14. テングニシ R900 3区第1層 |
| 7. アワビ属 R1583 1区第10層 | 15. アカニシ R1769 1区第10層 |
| 8. パイ R28 1区6土坑 | |

第3節 大坂城跡 18 - 1次調査出土の脊椎動物遺存体の同定と分析

丸山 真史 (東海大学)

1. 概要

これまで大坂城及び大坂城下町関連の発掘調査では、膨大な動物遺存体が出土している。大坂城跡に限定しても多数の地点で動物遺存体が出土しており、それらの多くは、豊臣期から徳川期に属する。町屋や武家屋敷で生じた食料残滓、骨角器の製作に伴って生じた廃材等であり、大坂市中における動物利用を明らかにするものである。当調査で出土した脊椎動物遺存体は、豊臣前期、豊臣後期のものが大部分を占め、古代あるいは中世のものも若干ある。種類や部位を同定したものは破片数にして511点以上を数え、その内訳は魚類140点、爬虫類111点以上(註)、鳥類24点、哺乳類236点である(表4~表8)。なお、以下の魚類と鳥類の大きさは現生骨格標本との比較による。

表4 脊椎動物遺存体の種名

| | |
|---|--|
| 軟骨魚綱 Chondrichthyes | アビ科 Gaviidae |
| 板鰓部綱の一種 Elasmobranchii, order, fam., gen. et sp. indet. | アビ科の一種 Gaviidae, gen. et sp. indet. |
| 硬骨魚綱 Osteichthyes | コウノトリ目 Ciconiiformes |
| ウナギ目 Anguilliformes | サギ科 Ardiidae |
| ハモ科 Muraenesocidae | サギ科の一種 Ardeidae, gen. et sp. indet. |
| ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp. | カモ目 Anseriformes |
| ニシン目 Clupeiformes | カモ科 Anatidae |
| ニシン科 Clupeidae | カモ科の一種 Anatidae, gen. et sp. indet. |
| ニシン科の一種 Clupeidae, gen. et sp. indet. | キジ目 Galliformes |
| コイ目 Cyprinida | キジ科 Phasianidae |
| コイ科 Cyprinidae | ニワトリ <i>Gallus domesticus</i> |
| フナ属の一種 <i>Carassius</i> sp. | キジ科の一種 Phasianidae, gen. et sp. indet. |
| コイ科の一種 Cyprinidae, gen. et sp. indet. | スズメ目 Passeriformes |
| ナマズ目 Siluriformes | カラス科 Corvidae |
| ナマズ科 Siluridae | カラス属の一種 <i>corvus</i> sp. |
| ナマズ属の一種 <i>Silurus</i> sp. | 哺乳綱 Mammalia |
| タラ目 Gadiformes | 霊長目 Primates |
| タラ科 Gadidae | ヒト科 Hominidae |
| マダラ <i>Gadus macrocephalus</i> | ヒト <i>Homo sapiens</i> |
| ボラ目 Mugiliformes | 食肉目 Carnivora |
| ボラ科 Mugilidae | イヌ科 Canidae |
| ボラ科の一種 Mugilidae, gen. et sp. indet. | イヌ <i>Canis familiaris</i> |
| カサゴ目 Scorpaeniformes | キツネ <i>Vulpes vulpes</i> |
| コチ科 Platycephalidae | ネコ科 Felidae |
| コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet. | ネコ <i>Felis catus</i> |
| スズキ目 Percidae | イタチ科 Mustelidae |
| スズキ科 Percichthyidae | カワウソ <i>Lutra lutra</i> |
| スズキ属 <i>Lateolabrax</i> sp. | 奇蹄目 Perissodactyla |
| シイラ科 Coryphaenidae | ウマ科 Equidae |
| シイラ <i>Coryphaena hippurus</i> | ウマ <i>Equus caballus</i> |
| アジ科 Carangiae | 偶蹄目 Artiodactyla |
| ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp. | ウシ科 Bovidae |
| タイ科 Sparidae | ウシ <i>Bos Taurus</i> |
| マダイ <i>Pagrus major</i> | カモシカ <i>Capricornis crispus</i> |
| タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet. | イノシシ科 Suidae |
| 爬虫綱 Reptilia | イノシシ <i>Sus scrofa</i> |
| カメ目 Chlonia | シカ科 Cervidae |
| スッポン科 Trionychidae | ニホンジカ <i>Cervus nippon</i> |
| スッポン <i>Trionyx sinensis</i> | 齧歯目 Rodentia |
| イシガメ科 Geoemydidae | ネズミ科 Muridae |
| イシガメ科の一種 Geoemydidae, gen. et sp. indet. | クマネズミ属の一種 <i>Rattus</i> sp. |
| 鳥綱 Aves | ネズミ科の一種 Muridae, gen. et sp. indet. |
| アビ目 Gaviformes | |

層から椎骨1点、計16点が出土している。2区第8層から椎骨3点、擬鎖骨（右）1点、第9層から椎骨1点、計5点が出土している。いずれも体長20cm以上で30～40cmと推定される個体が大部分を占める。

サワラ 1区1149土坑から椎骨1点が出土しており、体長80cm前後と推定される。2区第8層から椎骨2点が出土しており、体長80cm前後と推定される。

爬虫類

スッポン 1区801土坑から寛骨（腸骨・恥骨癒合）が1点出している。第10層から、椎骨（頸椎16胸椎18尾椎2）36点、肩甲骨・前烏口骨（左6右7）13点、寛骨（腸骨左2右1坐骨左4右1恥骨左2右2）12点等、計108点が出土している。2区第8層から烏口骨（左）1点が出土している。

イシガメ科 1区第7層から腹甲板（中腹骨板・左）1点が出土している。

鳥類（表9）

アビ科 1区第7層から脛足根骨（左）が1点出している。大きさは、シロエリオオハムより小さい。

サギ科 1区1149土坑から脛足根骨（左）1点が出土しており、遠位端最大幅（Bd）8.7mmを測り、コサギ程度の大きさである。

カモ族 1区1149土坑から上腕骨（左）、尺骨（左）が1点ずつ、計2点が出土している。尺骨の遠位端最大幅（Did）は、9.5mmを測る。上腕骨は計測できないが、マガモよりやや小さい。2区第8層から上腕骨（右）1点が出土しており、最大長（GL）94.2mmを測る。

ガン族 1区658土坑から上腕骨（左）、橈骨（右）、尺骨（右）が1点ずつ、計3点が出土しており、橈骨と尺骨は同一個体の可能性が高い。上腕骨の最大長（GL）134.4mm、尺骨の遠位端最大幅（Did）12.8mmを測る。2区第8層から尺骨（左2右2）4点、橈骨（左2右1）3点、手根中手骨（左1右1）2点、上腕骨（左）1点、計10点が出土している。これらのうち橈骨・尺骨・手根中手骨の左右2組と橈骨・尺骨の左1組は同一個体の可能性が高く、これらはマガンと同大かやや大きな個体である。それらとは別の尺骨は最大長（GL）174.6mmを測り、ヒシクイ程度の大きさである。また、上腕骨の近位部前位に、垂直方向の切傷が見られる。

ニワトリ 1区第10層から上腕骨（右）1点が出土しており、遠位端の関節部が縦方向に切断されている。2区第10層から大腿骨（左）、脛足根骨（右）が1点ずつ、計2点が出土している。大腿骨の近位端最大幅（Bp）は17.5mm、脛足根骨の遠位端最大幅（Bd）は13.7mmを測る。

キジ科 1区1149土坑から尺骨（右）、第7層から尺骨（左）が1点ずつ出している。それぞれの最大長（GL）は67.9mm、62.3mmを測る。

カラス属 1区1024土坑から尺骨（右）1点が出土しており、近位端最大幅（Bp）は11.4mmを測る。

哺乳類（表10～表12）

ヒト 1区163井戸から頭蓋骨が1点、552井戸から脛骨（右）1点、1149土坑から脛骨（左）1点、1259土坑から下顎骨（左）1点、第7層から頭蓋骨と腓骨が1点ずつ、第10層から脛骨（左）1点、計7点が出土している。第7層の頭蓋骨は縫合が完了していない。1149土坑の脛骨は両端が鋸で切断されており、1259土坑の下顎骨と第10層の脛骨は刀削と思われる深い傷が見られる。

骨のうち1点は遠位部に病変が見られる。

イノシシ/ブタ 1区445斜面から大腿骨(左)1点、1149土坑から椎骨、大腿骨(右)、脛骨(右)、指骨が1点ずつ、第10層から上腕骨(左)、大腿骨(右)が1点ずつ、計7点が出土している。1149土坑の大腿骨の遠位端最大幅(Bd)は46.0mmを測り、両骨端には癒合線が見られる若獣である。脛骨は最大長(GL)181.4mmを測り、近位端には癒合線が見られる若獣である。遺物包含層では、第10層の大腿骨の骨幹部後位には切傷が見られる。

クマネズミ属 1区第7層から下顎骨(左1右1)2点が出土している。2区第8層から下顎骨(左1右2)3点が出土している。

ネズミ科 1区763溝から大腿骨(左)1点、第7層から椎骨8点、大腿骨(左1右3)4点、上腕骨(左1右1)2点等計20点、第10層から大腿骨(左)1点、計22点が出土している。2区第8層から椎骨3点、大腿骨(左1右1)2点、橈骨(右)等計7点が出土している。

3. 大坂城三の丸における動物利用

種類と部位を同定したものにおける分類群の組成は、哺乳類が46%を占め、魚類、爬虫類、鳥類が続く(図164)。ただし、爬虫類は1区第10層で集中的に出土したスッポンであり、甲板は数量化しておらず、破片数としてはさらに多くなるが、同一個体のものが多く含まれている可能性が高い。冬眠中に自然死した可能性もあるが、重複部位から最小個体数は7個体と推定され、このような集中は人為に投棄したものと考えておきたい。スッポンは近世の大坂城下町関連の遺跡では一般的に出土しており、福島一丁目所在遺跡では、スッポンの背甲板に甲羅を解体しようとした庖丁傷が見られ、この地に料理茶屋が想定され、スッポンを賞味していたことが指摘されている(久保1999)。堂島蔵屋敷跡SH10-1次調査では、17世紀代から19世紀代まで継続して出土し、大部分は散乱状態で出土しており、上腕骨、大腿骨等の四肢骨、背甲板や腹甲板には切傷や切断された痕跡が見られ、解体して食用にしている(丸山2010)。鳥類は、カモ科が大部分を占めており、ガン類に相当する大きさの個体が多い。2区第8層では、同一個体の左右の橈骨・尺骨・手根中手骨(手羽先)が出土しており、これらも食用となったと考えられる。一方、ニワトリが少ないことは、豊臣前期の大坂ではまだ食用として一般的ではなかった可能性もあるが、即断は避けたい。

魚類は、哺乳類について出土量は多いが、遺跡土壌の水洗選別は豊臣後期の遺構に限っており、豊臣前期については調査中に肉眼で確認したものである。したがって、微細な骨片は見逃されている可能性が高く、同定した魚骨の大部分は体長20cm以上の中型から大型魚である。豊臣前期では、マダイを含むタイ科が約7割と多く、その他の魚種の出土量は極端に少ない(図165)。大坂城下町では豊臣期の魚市場跡の発掘調査が行われており、OS86-20次、AZ87-5次、OJ92-1次、OJ06-3次調査では、49種類にのぼる魚種が同定され、多様な魚種が大坂市中で流通していたことを示している。近世の屋

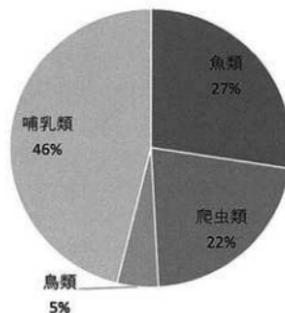


図164 脊椎動物遺存体の組成(N=211)

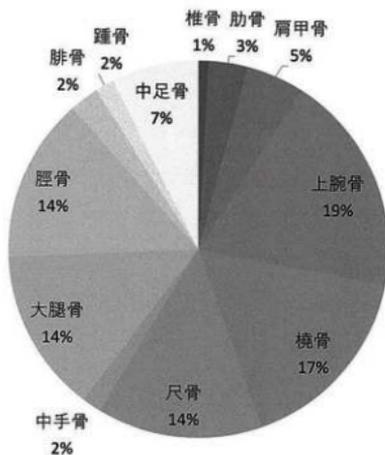


図 167 イヌの部位組成 (豊臣前期 N=121)

も付着する筋肉量が多い部位に集中しており、四肢骨には解体痕が見られるものもあり、他所で解体し、当地に持ちこみ、食用にしたと考えられる。イヌの出土が顕著な遺跡として、中世の草戸千軒町遺跡、大物遺跡、宮内堀脇遺跡、近世の小倉城代米蔵跡、明石城武家屋敷跡等が挙げられ、いずれも食用にされたと考えられている。近世の小倉城代米蔵跡や明石城武家屋敷跡では大量のイヌが出土しているが、京都や大坂城下町の多くの調査地点ではイヌの出土は少なく、中世に比べて近世における犬の消費は低調になっていると考えられる。出土した動物遺存体は、武家地に関連した生ゴミと考えられ、大量のイヌの出土は中世的かつ近世の武家地にも見られる犬食風習とも見られる。野生のシカやカモシカは狩猟によって得られたものであるが、出土部位は四肢骨に集中しており、他所で解体したものが持ち込まれたと考えられる。また、野生のカワウソ、キツネは、少ない肉よりも、良質の毛皮を目的としていたことも考えられる。加工痕のあるウシの角芯が出土していることは、近郊での小規模な細工を示しており、皮革も加工していた可能性もある。ネコやネズミは、近世遺跡で一般的に見られ、屋敷地内にいる動物として珍しくない。ネズミは、屋敷地内で駆除されたものと考えられる。ネコは、ネズミ除けとしての役割があり、良質な皮革の原料となり、薬用とすることもあったかもしれないが、日常的な食用ではないであろう。

4. まとめ

大坂城跡の従来発掘調査につづいて、当調査でも豊臣期の動物遺存体が大量に出土した。哺乳類が半数近くを占めており、なかでも大量のイヌの出土が当地における動物利用の最大の特徴となる。比較的大きなイヌが多く、出土部位は四肢骨に集中しており、解体痕が見られることから食料残渣であると考えられる。また、良質な毛皮をもつカワウソやキツネも出土しており、食用以外の動物利用が考えら

表5 1区動物遺存体集計表(1)

| 遺構/層位 | 種類 | 部位 | 左 | 右 | - | | |
|----------|---------|--------|------|------|------|---|---|
| 163 井戸 | 哺乳 | ヒト | | | 1 | | |
| 175 溝 | 魚 | マダラ | 椎骨 | | 1 | | |
| | | マダイ | 椎骨 | | 2 | | |
| | | マダイ | 方骨 | 1 | | | |
| | | タイ科 | 椎骨 | | 2 | | |
| | 不明 | 基後頭骨 | | 1 | | | |
| | | 腕鎖骨 | | 1 | | | |
| | 鳥 | 不明 | 指骨 | | 1 | | |
| 253 溝 | 魚 | マダイ | 腎臓棘 | | 2 | | |
| 283 落込み | 魚 | タイ科 | 椎骨 | | 3 | | |
| | | | 椎骨 | | 5 | | |
| | | マダイ | 口蓋骨 | 1 | | | |
| | | | 角骨 | | 1 | | |
| | | | 方骨 | | 1 | | |
| | | | 主総蓋骨 | 1 | | | |
| | | | 上腕鎖骨 | 1 | | | |
| | | | 不明 | 鰭棘 | | | 1 |
| | | イノシシ | 大腿骨 | 1 | | | |
| | | 445 斜面 | 哺乳 | シカ | 脛骨 | 1 | |
| 548 溝 | 哺乳 | イヌ | 橈骨 | | 1 | | |
| 552 井戸 | 哺乳 | ヒト | 脛骨 | | 1 | | |
| 556 溝 | 鳥 | 不明 | 不明 | | 1 | | |
| 616 土坑 | 哺乳 | シカ | 脛骨 | | 1 | | |
| 642 土坑 | 哺乳 | イヌ | 橈骨 | | 1 | | |
| 649 埋桶 | 哺乳 | イヌ | 上腕骨 | 2 | | | |
| 658 土坑 | 魚 | ボラ属 | 主総蓋骨 | 1 | | | |
| | | | マダラ | 椎骨 | | 1 | |
| | | | シイラ | 椎骨 | | 5 | |
| | | マダイ | 前頭骨 | | 1 | | |
| | | | 上後頭骨 | | 1 | | |
| | | | 前上顎骨 | 1 | 1 | | |
| | | | 椎骨 | | | 2 | |
| | | | 主上顎骨 | 1 | | | |
| | | | 歯骨 | 1 | | | |
| | | | 角骨 | 1 | | | |
| | | | 口蓋骨 | | 1 | | |
| | | | 前総蓋骨 | 1 | | | |
| | | | 主総蓋骨 | 1 | | | |
| | | | 上腕鎖骨 | 1 | 1 | | |
| | | | 肩甲骨 | 1 | | | |
| | | | タイ科 | 下総蓋骨 | 2 | | |
| | | | | 椎骨 | | | 5 |
| | | | 不明 | 椎骨 | | | 2 |
| | | | 鳥 | カモ族 | 上腕骨 | 1 | |
| | 橈骨 | | | | 1 | | |
| | 尺骨 | | | | 1 | | |
| | 哺乳 | シカ | 肩甲骨 | | 1 | | |
| | 724 礎石 | 哺乳 | イヌ | 大腿骨 | | 1 | |
| | | | | 中足骨 | | 2 | |
| | | | | 脛骨 | | 1 | |
| | | | | イヌ? | 腓骨 | | 1 |
| | | 725 礎石 | 哺乳 | イヌ | 中足骨 | | 1 |
| 753 埋桶 | | 魚 | マダイ | 舌顎骨 | | 1 | |
| 755 井戸 | | 哺乳 | ウマ | 遊離歯 | | 1 | |
| 1023 埋桶 | | 哺乳 | シカ | 橈骨 | 1 | | |
| 1024 土坑 | | 鳥 | カラス属 | 尺骨 | | 1 | |
| 1026 溝 | | 哺乳 | ウシ | 角芯 | | 1 | |
| 1030 土坑 | | 哺乳 | シカ | 肩甲骨 | 1 | | |
| 1079 井戸 | | 哺乳 | イヌ | 上腕骨 | 1 | | |
| | | | | 尺骨 | 1 | | |
| 1117 土坑 | | 哺乳 | カモシカ | 肩甲骨 | | 1 | |
| 1118 土坑 | | 哺乳 | シカ | 肩甲骨 | 1 | | |
| | | | | 歯骨 | 1 | | |
| | | 魚 | ハマ属 | 角舌骨 | 1 | | |
| | | | | 胸鰭棘 | 1 | | |
| | | | スズキ属 | 主総蓋骨 | 2 | | |
| | | | マダイ | 口蓋骨 | | 1 | |
| | | 前頭骨 | | | | 1 | |
| | | 間総蓋骨 | | 1 | | | |
| | | 主上顎骨 | | 1 | | | |
| | | サワラ | | 椎骨 | | | 1 |
| | | 不明 | | 鰭棘 | | | 1 |
| | | 鳥 | | サギ科 | 脛足根骨 | 1 | |
| | | | | | 尺骨 | 1 | |
| | カモ族 | 上腕骨 | | 1 | | | |
| | | 尺骨 | | | 1 | | |
| | キジ科 | 尺骨 | | 1 | | | |
| | 1149 土坑 | 哺乳 | ヒト | 脛骨 | 1 | | |
| | | | | 椎骨 | | 1 | |
| | | | | 肋骨 | | 3 | |
| | | | | 肩甲骨 | 3 | | |
| 上腕骨 | | | | 4 | 3 | | |
| 橈骨 | | | | 2 | 4 | | |
| 尺骨 | | | | 2 | 3 | | |
| 中手骨 | | | | 1 | | | |
| 大腿骨 | | | | 2 | 8 | | |
| 中足骨 | | | | | 4 | | |
| 脛骨 | | | | 3 | 6 | | |
| 腓骨 | | | | 1 | 2 | | |
| 踵骨 | | | 1 | | | | |
| ネコ | | 上腕骨 | 2 | | | | |
| | | 大腿骨 | 2 | | | | |
| | | 脛骨 | 1 | | | | |
| | | 椎骨 | | | 1 | | |
| | | 大腿骨 | | | 1 | | |
| | 脛骨 | | | 1 | | | |
| イノシシ/ブタ | 指骨 | | | 1 | | | |
| イノシシ/ブタ? | 上腕骨 | | | 1 | | | |

表7 1区動物遺存体集計表(3)

| 遺構/層位 | 種類 | 部位 | 左 | 右 | - | |
|-------|------|-----|-----|---|---|--|
| 第10層 | 哺乳 | シカ | 寛骨 | | 1 | |
| | | | 肩甲骨 | 1 | 1 | |
| | | | 尺骨 | 1 | | |
| | | | 上腕骨 | 2 | | |
| | | | 大腿骨 | 1 | 1 | |
| | | | 中手骨 | 1 | 1 | |
| | | | 中足骨 | | 2 | |
| | | | 橈骨 | 2 | | |
| | ネズミ科 | 大腿骨 | 1 | | | |

表8 2区動物遺存体集計表

| 遺構/層位 | 種類 | 部位 | 左 | 右 | - | | |
|-------|----|----------|------|---|---|---|--|
| 462溝 | 哺乳 | イノシシ/ブタ? | 上腕骨 | | 1 | | |
| | | ネコ | 脛骨 | 1 | | | |
| | | ニシン科 | 椎骨 | | | 1 | |
| 第8層 | 魚 | コイ科 | 椎骨 | | 2 | | |
| | | ナマズ属 | 椎骨 | | 2 | | |
| | | コチ科 | 椎骨 | | 1 | | |
| | | マダラ | 主鰓蓋骨 | 1 | | | |
| | | タラ科 | 歯骨 | | 1 | | |
| | | | 椎骨 | | | 1 | |
| | | ボラ属 | 主鰓蓋骨 | 1 | | | |
| | | マダイ | 神経頭蓋 | | | 1 | |
| | | | 前頭骨 | | 2 | | |
| | | | 上後頭骨 | | 2 | | |
| | | | 椎骨 | | | 8 | |
| | | | 涙骨 | 1 | | | |
| | | | 主上顎骨 | 1 | 4 | | |
| | | | 前上顎骨 | | 3 | | |
| | | | 口蓋骨 | 4 | 2 | | |
| | | | 歯骨 | 2 | | | |
| | | | 角骨 | 2 | 2 | | |
| | | | 舌顎骨 | 1 | | | |
| | | 前鰓蓋骨 | 4 | | | | |
| | | 主鰓蓋骨 | | 1 | | | |
| | | 下鰓蓋骨 | 1 | | | | |
| | | 角舌骨 | 1 | | | | |
| | | タイ科 | 擬頭骨 | | 1 | | |

| 遺構/層位 | 種類 | 部位 | 左 | 右 | - | |
|--------|--------|--------|-------|---|---|----|
| 第8層 | 魚 | タイ科 | 椎骨 | | 3 | |
| | | タイ科? | 椎骨 | | 1 | |
| | | サワラ | 椎骨 | | 2 | |
| | | ヒラメ? | 椎骨 | | 1 | |
| | | 不明 | 椎骨 | | 3 | |
| | | | 前上顎骨 | | 1 | |
| | | | 擬頭骨 | | 1 | |
| | | | 鱗棘 | | | 11 |
| | | | 鱗 | | | 1 |
| | 爬虫 | スッポン | 烏口骨 | 1 | | |
| | 鳥 | カモ科? | 頭蓋骨 | | | 1 |
| | | ガン族 | 上腕骨 | | 1 | |
| | | | 上腕骨 | 1 | | |
| | | | 橈骨 | 2 | 1 | |
| | | | 尺骨 | 3 | 1 | |
| | | 不明 | 手根中手骨 | 1 | 1 | |
| | | 不明 | 指骨 | | | 1 |
| ヒト? | | 頭蓋骨 | | | 1 | |
| ネコ | | 上腕骨 | | 1 | | |
| カワウソ | | 椎骨 | | | 3 | |
| | | 寛骨 | 1 | 1 | | |
| | 仙骨 | | | 1 | | |
| | 大腿骨 | | 1 | | | |
| | 脛骨 | | 1 | | | |
| | ウマ | 中足骨 | 1 | | | |
| | クマネズミ属 | 下顎骨 | 1 | 2 | | |
| | ネズミ科 | 椎骨 | | | 3 | |
| 橈骨 | | | 1 | | | |
| 大腿骨 | | 1 | 1 | | | |
| | | 中手/中足骨 | | 1 | | |
| 第9層 | 魚 | マダイ | 上後頭骨 | | 1 | |
| | | タイ科 | 椎骨 | | 1 | |
| | | タイ科? | 椎骨 | | 2 | |
| | | 不明 | 椎骨 | | 4 | |
| 第10層 | 鳥 | ニワトリ | 大腿骨 | 1 | | |
| | | | 跗足根骨 | | 1 | |
| 第14層以下 | 哺乳 | ウマ | 遊離歯 | 2 | | |
| 第16層 | 哺乳 | ウマ | 遊離歯 | 1 | 1 | |

表 11 哺乳類の計測値（イヌ除く）(2)

| 地区 | 遺構/層位 | 種類 | 部位 | 左右 | 計測値 (mm) |
|----|-------|------|-----|----|----------------------------------|
| 1区 | 第10層 | ネコ | 脛骨 | 左 | Bd13.9 |
| 1区 | 第10層 | ネコ | 脛骨 | 右 | GL110.7, Bp18.5, Bd13.8, SD6.4 |
| 2区 | 462溝 | ネコ | 脛骨 | 左 | GL116.7, Bp20.3, Bd14.7, SD7.6 |
| 2区 | 第8層 | ネコ | 上腕骨 | 右 | GL104.9, Bp16.8, Bd19.9, SD7.3 |
| 2区 | 第8層 | カワウソ | 寛骨 | 左 | SH12.8, LA17.6 |
| 2区 | 第8層 | カワウソ | 寛骨 | 右 | GL113.6, SH12.3, LFo30.4, LA16.5 |
| 2区 | 第8層 | カワウソ | 大腿骨 | 右 | GL92.0, Bp26.0, Bd23.4, SD9.8 |
| 2区 | 第8層 | カワウソ | 脛骨 | 右 | GL104.9, Bp24.9, Bd16.7, SD6.9 |

表 12 イヌの計測値

推定体高の単位は cm

| 地区 | 遺構/層位 | 部位 | 未総合 | 左右 | 計測値 (mm) | 推定体高 | 大きさ |
|----|--------|-----|------|----|---------------------------------|------|-----|
| 1区 | 548溝 | 橈骨 | | 左 | GL153.9, Bp16.5, Bd21.6, SD12.9 | 48.3 | 中大 |
| 1区 | 649埋桶 | 上腕骨 | | 右 | GL145.1, Bp29.3, Bd31.4, SD12.2 | 45.0 | 中 |
| 1区 | 649埋桶 | 上腕骨 | 近位端 | 右 | Bd27.1, SD10.8 | - | - |
| 1区 | 724礎石 | 脛骨 | | 左 | GL175.2, SD12.3 | 49.4 | 中大 |
| 1区 | 763溝 | 上腕骨 | 近位端 | 右 | Bd26.2, SD11.6 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 上腕骨 | 近位端 | 右 | Bd28.4, SD10.8 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 上腕骨 | 近位端 | 右 | Bd29.8, SD11.4 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 尺骨 | 遠位端 | 右 | DPA22.1, SDO17.3 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 尺骨 | 遠位端 | 右 | DPA22.0, SDO18.6 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 尺骨 | | 左 | GL154.4, DPA20.5, SDO17.8 | 41.2 | 中小 |
| 1区 | 763溝 | 大腿骨 | | 左 | GL163.1, Bp36.1, Bd28.7, SD13.6 | 46.9 | 中 |
| 1区 | 763溝 | 大腿骨 | | 右 | Bd29.1, SD13.4 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 脛骨 | | 左 | Bd20.4 | - | - |
| 1区 | 763溝 | 脛骨 | | 右 | GL153.9, Bp32.8, Bd20.4, SD12.4 | 43.2 | 中 |
| 1区 | 763溝 | 踵骨 | 踵骨突起 | 左 | GB15.5 | - | - |
| 1区 | 1149土坑 | 肩甲骨 | | 左 | HS112.5, GLP26.0 | 39.2 | - |
| 1区 | 1149土坑 | 肩甲骨 | | 左 | GLP26.1 | - | - |
| 1区 | 1149土坑 | 肩甲骨 | | 右 | HS96.7, GLP22.4 | 33.5 | - |
| 1区 | 1149土坑 | 上腕骨 | | 左 | Bd27.4 | - | - |
| 1区 | 1149土坑 | 上腕骨 | | 左 | GL144.3, Bp25.6, Bd27.5, SD10.7 | 44.7 | 中 |
| 1区 | 1149土坑 | 上腕骨 | | 右 | GL153.3, Bp26.6, Bd29.7, SD12.4 | 47.9 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 橈骨 | | 左 | GL141.1, Bp15.7, Bd21.4, SD10.6 | 44.4 | 中 |
| 1区 | 1149土坑 | 橈骨 | | 右 | GL147.3, Bp16.5, Bd21.5, SD12.5 | 46.2 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 尺骨 | | 左 | GL171.8, DPA22.0, SDO19.3 | 45.5 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 尺骨 | | 左 | DPA20.4, SDO17.5 | - | - |
| 1区 | 1149土坑 | 大腿骨 | | 右 | GL173.7, Bp37.8, Bd29.7, SD13.8 | 50.4 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 大腿骨 | | 右 | GL163.1, Bp36.3, Bd28.9, SD13.3 | 47.0 | 中 |
| 1区 | 1149土坑 | 大腿骨 | | 右 | GL180.5, Bp39.0, Bd31.3, SD13.5 | 52.7 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 脛骨 | | 左 | GL180.9, Bp34.1, Bd23.3, SD13.0 | 51.2 | 大 |
| 1区 | 1149土坑 | 脛骨 | | 右 | GL168.7, Bp31.3, Bd22.6, SD12.5 | 47.4 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 脛骨 | | 右 | GL166.9, Bp31.2, Bd20.9, SD12.4 | 46.9 | 中大 |
| 1区 | 1149土坑 | 脛骨 | | 右 | Bd21.1 | - | - |
| 1区 | 1149土坑 | 脛骨 | | 右 | GL152.1, Bd19.7, SD13.0 | 42.7 | 中 |
| 1区 | 1149土坑 | 腓骨 | | 左 | GL153.3 | 46.3 | - |
| 1区 | 1149土坑 | 踵骨 | | 右 | GL46.5, GB18.4 | - | - |
| 1区 | 第10層 | 肩甲骨 | | 右 | GLP26.6 | - | - |
| 1区 | 第10層 | 上腕骨 | | 右 | Bd32.3 | - | - |
| 1区 | 第10層 | 橈骨 | | 右 | Bd20.6 | - | - |
| 1区 | 第10層 | 尺骨 | | 右 | DPA22.8, SDO19.5 | - | - |

第4節 大坂城跡18-1次調査出土の人骨について

坂上和弘(国立科学博物館 人類研究部)

本報告書は2018年から2019年にかけて行われた大阪第6地方合同庁舎(仮称)整備事業に関わる発掘調査で出土した人骨に関する報告書である。調査1区第6面668井戸の内部から、1個体分の頭骨と頸椎が出土しており、頭蓋内には脳組織が残存していた。

本人骨は国立科学博物館へ輸送され、清掃・修復・整理・同定が行われた。人骨の修復にはButvar B76のアセトン希釈溶液を接着剤として用いた。脳が残存していることが示すように、骨の保存状態はかなり良好である。骨の色調は濃い茶褐色であり、東京都の「江戸府内遺跡」から出土する人骨と同様であり、泥質の土壌からの結成作用による着色と判断される。2020年現在、本遺跡出土人骨は国立科学博物館人類研究部で保管・管理されている。

頭骨の撮影はキャノン EOSSD Mark IIを用い、1.0mの距離から100mmマクロレンズで撮影した。計測は馬場(1991)のマルチン法に従って実施した(表13)。比較集団としては、「複数の江戸府内遺跡」から出土した江戸時代人の「Hayaoko(早稲出土の『町人』集団)グループ」と「Kamekan(豊棺出土の『武家』集団)グループ」の平均値(Sakaue,2012)を比較集団として用い、参考として、東京都や神奈川県複数の遺跡から出土した中世時代人の「Medieval」グループを用いた。

性別は、眉弓の有無及び乳様突起の形態から判断した(坂上・安達,2009)。死亡時年齢は頭蓋の縫合を用いたMeindl and Lovejoy(1985)の方法を用いた。本人骨には人為的損傷も認められるが、人為的損傷の判定はSakaue(2014)に基づいて行った。頭蓋内部には脳の組織が残存している。頭骨を破損せずにこれを観察する目的で、島津マイクロフォーカスX線CTシステム inspeXioを用いて撮影し、CT画像から分析した。

1) 形態特徴

本人骨の保存状態は図168に示す通りである。ほぼ完全な頭骨と下顎骨の左側部、舌骨と左大角、そして第1頸椎(環椎)、第2頸椎(軸椎)、第3頸椎が残存している。

性別は、前頭骨の眉弓が発達し、側頭骨の乳様突起の発達強く、前頭結節は認められないことから、「男性」と推定された。また、第3大臼歯は未萌出であるが、頭蓋縫合はMeindl and Lovejoy(1985)の方法では、頭蓋冠部が48.8±10.5歳、側頭部が41.1±10.0歳と推定されることから、死亡時年齢群は「中年」と推定される。

本個体の頭蓋最大長は186.9mmと、江戸男性平均(179.4mm)よりもかなり大きく、頭蓋最大幅は135.8mmと、江戸男性平均(139.9mm)よりも小さい。バジオン・プレグマ高は142.6mmと、江戸男性平均(137.1mm)よりも大きい。その結果、長幅示数は72.6とかなりの「長頭」に属し、長高示数は76.3と「高頭」に属する。頭蓋3主径の平均値である頭蓋モズルスは155.1と、江戸男性平均(152.1)よりもやや大きい。上面観では、頭頂結節の発達が弱く細長い楕円形を示す。上面から見ると頬骨弓は完全に見えるため、「顕頬弓」と言える。3主縫合(冠状縫合・矢状縫合・人字縫合)はほぼ消失しており、いずれの縫合にも縫合間骨は認められない。プレグマ部に薄い骨増殖が認められる。これは、プレグマ部に何らかの外力がかかることで形成された可能性がある。後面観では、頭頂結節から側

第2主成分と第3主成分の主成分得点から散布図を作成したものが図169となる。この図を見ると、本頭骨が、中世時代人集団の分布の範囲内に位置しており、江戸時代町人の分布内にも入るが辺縁に当たり、江戸時代武家の集団や大名の集団とはかなり異なる形態を示していることが理解できる。

2) 人為的損傷

人為的損傷、なかでも鋭利損傷(Sharp-edged trauma)は、1)直線状である、2)骨の欠損部分には明瞭な辺縁を持つ、3)欠損部分には平坦で滑らかな平滑面がある、という特徴が併存していることで判断できる(Sakae, 2014)。これらの基準で本人骨を観察すると、以下の9箇所に鋭利損傷が認められた。また、この平滑面の向きや大きさ、平滑面表面の線条痕から、利器がどのように打ちこまれたのかを推定することが可能である。そこで、頭骨の耳眼水平面を水平に固定し、平滑面にデジタル角度計を設置して平滑面の角度を計測した。耳眼水平面を設定できない下顎骨や頸椎の場合はおおよそ解剖学的位置に設置して計測した。

1) 左頬骨縁結節部(図170)

本損傷の平滑面は外側方向に向き(耳眼水平面に対して95度)、最大径は上下方向の9.5mm、最小径は前後方向の8.7mmの大きさを持つ。従って、利器は上方から下方にかけて切り込まれており、約1cm切り込んで止まっている。この損傷から、骨折線が下方向に走行している。

2) 左側頭骨頬骨突起基部(図171)

本損傷の平滑面は外側方向に向き(耳眼水平面に対して93度)、最大径は前後方向の9.7mm、最小径は6.7mmの大きさを持つ。この平滑面は頬骨突起基部の途上で消失しており、刃は途中で停止したと推定される。

前述の1)の平滑面とほぼ同じ方向・角度であり、両損傷の最大径は59.5mmであることから、同じ斬撃で形成された可能性が高い(図172)。もしそうならば、加害者は本屍の正面に位置し、刃の長さも最低でも6cm以上ある利器を上から下に振ったと推定される。

3) 右上顎骨歯槽部(図173)

本損傷の平滑面は下前方向に向き(耳眼水平面に対して120度)、最大径は歯槽部の近一遠心方向で34.6mm、最小径は右犬歯部の頬一舌側方向で7.2mmである。また、右第1大臼歯の頰側咬頭と左中切歯の近心側でも平滑面が形成されている。歯槽部の平滑面と歯の平滑面とは段差があり、歯の平滑面はやや湾曲して走行しているため、同じ斬撃によるものではない可能性もある。ただし刃の軌道が斜め上から斜め下方に曲がったのだとすると矛盾はない。従って、利器は本屍頭部の左側面または右側面から斜め上前方から下方に向けて切り込まれたと推定される。

4) 下顎骨左歯槽部(図174)

本損傷の平滑面は下顎骨の左犬歯の近心歯槽部にあり、斜め前方に向く(耳眼水平面に対して109度)。最大径は頬一舌方向の9.1mmで、最小径は上下方向の6.9mmである。平滑面の下端には、刃が侵入して止まった際に形成される「切れ込み」が存在している。従って本屍の上方から下方に向けて切り込まれており、約7mm切り込んで止まっている。

前述の損傷「3」の平滑面とほぼ同じ方向・角度であることから、同じ斬撃で形成された可能性が高い。もしそうならば、加害者は、本屍の正面または左側面に位置し、斜め上前方から下方に向けて利器

この損傷は前述の損傷「6」の下顎体底の損傷と同一斬撃によって形成された可能性があるが、「損傷の位置」以外にそれを支持する積極的な根拠はない。

以上の損傷を、頭部は図 180、頸部は図 181 にまとめている。これを見ると、本屍は最低でも頭部に4回、頸部に3回、鋭利な刃物によって切り込まれたと考えられる。これらの斬撃は、その位置や性質から、戦闘時に形成された損傷（前述の損傷「1と2」、「3と4」）と、戦闘後に頸部を離断する際に形成された損傷（前述の損傷6、7、8、9）、に分けられる。つまり、本屍は何らかの戦闘行為によって負傷または死亡し、その後数回にわたって頸部離断を試みられた、と推定される。また、いずれの損傷も同一の利器によって形成されたとする積極的な根拠はないが、「刃が6cm以上ある利器」によって形成されたと考えても矛盾はない。そしてこの利器としては日本刀（小太刀含む）や薙刀等の「切る」ための利器であり、槍等の「突く」ものではない、と推定される。

3) 脳

本人骨の頭蓋内部に残存している脳の残存状況は図 182 と 183 に示す。脳は頭頂部に広く層状となった状態で固着している。これは、脳が腐敗していく過程で液状化し、頭頂部に広がっていったことを意味している。つまり、水もしくは泥の中で、頭頂部を下にした状態で放置されていたと考えられる。

脳断面の形状から、残存している脳の部位は大脳の左頭頂葉部と推定される。残存している部位には血腫等の病変は認められなかった。

4) まとめ

以上をまとめると、本頭骨は、1)「長頭」であり、眼窩の形状が四角くて低い、顔が低い等の特徴を持つが、中世時代人的な形状を持つ頭骨と言える。2) 本人骨は、少なくとも7回、鋭利な刃を持つ利器によって人為的損傷を受けている。「戦闘行為」とその後数回にわたって頸部離断が試みられた、と推定される。3) 脳が頭蓋冠部に広く固着し残存している。脳が腐敗する前、恐らく死亡直後に、井戸の底部の水分を多く含む泥質土壌に頭頂部を下にして陥没し、そのまま放置されていたことを意味する。

これらから、本人骨は戦闘行為によって負傷または死亡した後、頸部を離断された人物のものであって、第三者によって離断された頭部が井戸の付近に持ち込まれ、意図的に頭部を隠す目的で井戸に沈められた、もしくは頭部を井戸の水で洗浄する目的で洗っていた際に落としてしまった、と推定される。井戸の水中に頭部が落ちた場合、井戸の利用者にとって水質汚染は大変重大な問題であり、可及的速やかに頭部を取り除く必要があったはずである。それにも関わらず、頭部は取り除かれず、現代まで井戸の底に存在していたという事実は、頭部が井戸に落ちて以降この井戸が利用されていなかった可能性を示唆している。

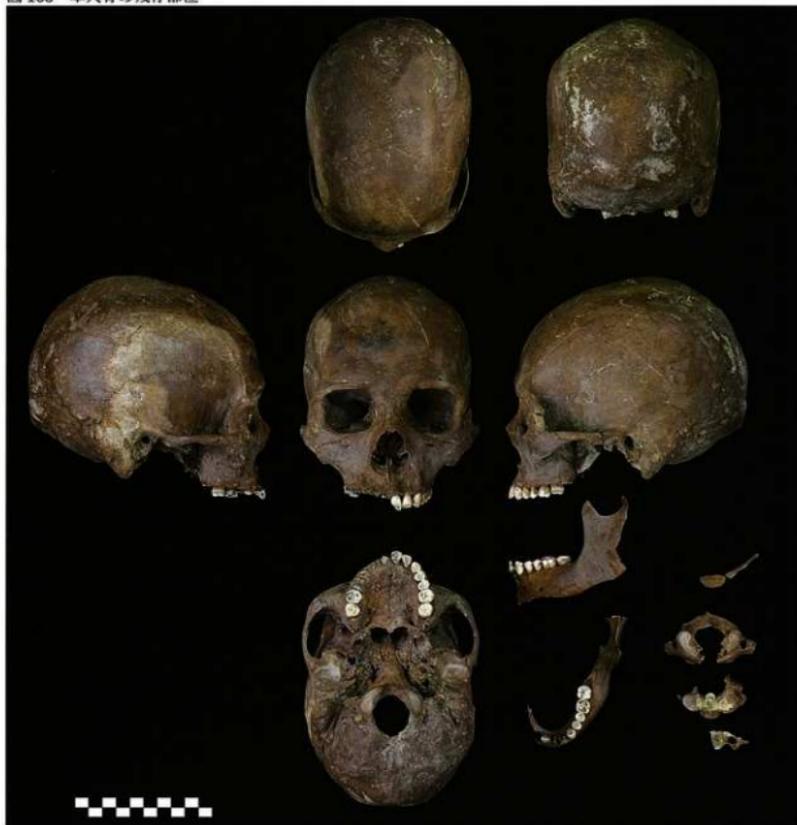
引用・参考文献

- ・馬場悠男 (1991) 人骨計測法。『人類学講座 別巻 1 人体計測法』 雄山閣
- ・Meindl R.S. and Lovejoy C.O. (1985) Ectocranial suture closure: A revised method for the determination of skeletal age at death based on the lateral-anterior sutures. *American Journal of Physical Anthropology* 68:57-66.
- ・Sakaue K. (2012) Craniofacial Variation among the Common People of the Edo Period. *Bulletin*

表 13 人骨の計測値

| マルチン No. | 計測項目 | 大塚純勝 | Hayake (N=147) | | Kamekan (N=58) | | Medieval (N=30) | |
|------------|------------|-------|----------------|------|----------------|------|-----------------|------|
| | | | Mean | S.D. | Mean | S.D. | Mean | S.D. |
| 1 | 最大長 | 186.9 | 181.4 | 6.5 | 177.8 | 6.2 | 183.3 | 6.4 |
| 8 | 最大幅 | 135.8 | 138.3 | 4.6 | 141.0 | 5.0 | 138.1 | 4.0 |
| 17 | バジオン・フレグマ高 | 142.6 | 136.1 | 4.7 | 138.1 | 5.6 | 138.1 | 5.7 |
| 9 | 最小前歯幅 | 100.2 | 93.4 | 4.3 | 94.2 | 4.9 | 93.3 | 4.1 |
| 10 | 最大前歯幅 | 114.9 | 114.6 | 4.2 | 116.9 | 5.5 | 114.9 | 4.1 |
| 5 | 顎蓋総長 | 107.3 | 101.7 | 4.5 | 100.0 | 4.1 | 103.2 | 5.0 |
| 11 | 顎耳幅 | 126.4 | 125.9 | 4.4 | 125.0 | 4.3 | 126.9 | 4.4 |
| 12 | 最大後歯幅 | 111.8 | 108.5 | 4.6 | 108.3 | 5.1 | 110.0 | 5.3 |
| 40 | 顔長 (Go+Ti) | 105.1 | 99.2 | 5.0 | 96.3 | 5.8 | 101.3 | 4.6 |
| 14 | 顎蓋最小幅 | 75.2 | 68.6 | 3.5 | 69.5 | 4.1 | 67.5 | 3.4 |
| 7 | 大後歯孔長 | 32.1 | 35.8 | 2.2 | 35.4 | 2.4 | 35.6 | 2.1 |
| 16 | 大後歯孔幅 | 27.5 | 29.5 | 1.9 | 29.8 | 2.2 | 29.2 | 1.8 |
| 23 | 水平間 | 511.5 | 518.2 | 14.3 | 514.5 | 13.6 | 517.2 | 18.1 |
| 24 | 橋長 | 310.0 | 312.5 | 9.4 | 320.5 | 11.6 | 309.6 | 9.1 |
| 26 | 正中前歯長 | 127.0 | 126.1 | 5.7 | 126.4 | 5.9 | 125.0 | 6.5 |
| 27 | 正中前歯幅 | 138.5 | 126.2 | 8.0 | 125.9 | 8.6 | 129.6 | 6.0 |
| 28 | 正中後歯長 | 122.0 | 118.0 | 8.3 | 118.0 | 5.3 | 117.9 | 7.3 |
| 25 | 正中矢状長 | 387.5 | 370.3 | 13.4 | 370.3 | 12.4 | 372.4 | 12.9 |
| 29 | 正中前歯長 | 112.7 | 110.7 | 4.4 | 110.5 | 4.7 | 111.3 | 4.8 |
| 30 | 正中前歯幅 | 121.7 | 112.7 | 6.2 | 112.4 | 7.2 | 115.9 | 4.0 |
| 31 | 正中後歯長 | 103.2 | 98.3 | 5.3 | 99.5 | 3.9 | 98.7 | 4.0 |
| 43 | 上顎幅 | 111.4 | 104.6 | 4.0 | 104.0 | 4.2 | 105.1 | 4.1 |
| 43a | 前上顎幅 | 101.4 | 97.3 | 3.9 | 96.9 | 4.0 | 97.3 | 3.8 |
| | 前上顎歯長 | 16.6 | 14.1 | 2.4 | 14.4 | 3.0 | 14.7 | 2.3 |
| 44 | 両眼幅 | 100.9 | 97.9 | 3.7 | 97.2 | 4.1 | 98.4 | 3.9 |
| 45 | 頬骨弓幅 | 138.8 | 135.0 | 4.5 | 133.0 | 5.2 | 136.8 | 4.9 |
| 46 | 中顎幅 | 106.5 | 100.9 | 4.8 | 97.6 | 4.9 | 102.9 | 5.2 |
| 46b | 前中顎幅 | 107.6 | 100.2 | 4.8 | 98.0 | 4.8 | 102.9 | 5.2 |
| | 頬骨上顎前歯線長 | 23.7 | 22.6 | 3.3 | 23.8 | 3.0 | 22.7 | 3.6 |
| | 上顎高マルチン | 72.7 | 72.2 | 4.2 | 72.9 | 3.6 | 70.0 | 3.8 |
| 48H | 上顎高ハウエルズ | 70.6 | 68.3 | 4.0 | 70.2 | 3.3 | 66.6 | 3.8 |
| 48d | 頬骨最小高 | 25.9 | 24.3 | 2.5 | 23.8 | 2.5 | 24.1 | 2.1 |
| 49a | 眼窩間幅 | 22.6 | 21.1 | 2.0 | 20.6 | 2.1 | 22.7 | 2.3 |
| 50 | 前眼窩間幅 | 16.1 | 17.0 | 2.0 | 16.9 | 2.1 | 18.5 | 2.3 |
| 51 | 眼窩幅 | 43.6 | 43.3 | 1.9 | 43.3 | 1.9 | 42.4 | 2.1 |
| 52 | 眼窩高 | 33.7 | 34.2 | 1.9 | 35.6 | 1.8 | 33.8 | 1.5 |
| 54 | 鼻幅 | 28.0 | 25.5 | 1.9 | 24.5 | 1.7 | 26.0 | 1.8 |
| 55 | 鼻高 | 54.6 | 52.3 | 3.0 | 53.7 | 2.6 | 51.9 | 2.8 |
| 57 | 鼻骨最小幅 | 8.3 | 7.2 | 1.6 | 7.0 | 2.0 | 8.3 | 2.1 |
| | 鼻骨最長長 | 3.0 | 2.4 | 1.0 | 2.6 | 1.0 | 2.5 | 1.0 |
| 60 | 上顎歯槽長 | 56.2 | 52.2 | 3.2 | 50.6 | 3.6 | 52.6 | 3.0 |
| 61 | 上顎歯槽幅 | 69.5 | 65.7 | 3.8 | 65.6 | 3.9 | 66.1 | 3.1 |
| 62 | 口蓋長 | 49.3 | 45.4 | 2.8 | 44.8 | 3.0 | 45.1 | 3.1 |
| 63 | 口蓋幅 | 43.4 | 40.7 | 3.3 | 40.1 | 5.5 | 42.4 | 2.5 |
| 8/1 | 長軸示数 | 72.6 | 76.3 | 3.5 | 79.4 | 3.8 | 75.4 | 2.7 |
| 17/1 | 長径示数 | 76.3 | 75.1 | 3.2 | 77.7 | 3.2 | 75.4 | 3.8 |
| 17/8 | 幅高示数 | 105.0 | 98.5 | 4.3 | 98.0 | 4.3 | 100.1 | 5.4 |
| 9/10 | 横高示数 | 87.2 | 81.5 | 3.3 | 80.6 | 3.2 | 81.2 | 3.3 |
| 9/8 | 横前歯頂面示数 | 73.8 | 67.6 | 3.4 | 66.8 | 3.4 | 67.6 | 3.3 |
| 8/12 | 横後歯頂面示数 | 121.5 | 127.6 | 5.5 | 130.4 | 6.0 | 125.7 | 5.9 |
| 40/5 | 顔長示数 | 97.9 | 97.6 | 4.3 | 96.3 | 4.8 | 98.2 | 3.9 |
| 16/7 | 大後歯孔長軸示数 | 85.8 | 82.7 | 5.6 | 84.3 | 6.3 | 82.1 | 5.1 |
| 27/26 | 矢状前歯頂面示数 | 109.1 | 100.2 | 6.6 | 99.8 | 8.6 | 103.9 | 7.0 |
| 28/26 | 矢状後歯頂面示数 | 96.1 | 93.8 | 7.3 | 93.5 | 6.4 | 94.4 | 5.5 |
| 29/26 | 矢状前歯曲示数 | 112.4 | 87.8 | 1.8 | 87.4 | 1.9 | 89.1 | 1.7 |
| 30/27 | 矢状前歯曲示数 | 103.8 | 89.3 | 1.8 | 89.4 | 2.6 | 89.5 | 1.9 |
| 31/28 | 矢状後歯曲示数 | 110.2 | 83.4 | 2.8 | 84.4 | 2.4 | 83.9 | 3.0 |
| (1+8+17)/3 | 顔蓋マズルス | 29.2 | 151.9 | 3.6 | 152.4 | 4.0 | 153.2 | 3.6 |
| | 前歯骨平均示数 | 16.4 | 14.5 | 2.3 | 14.8 | 3.2 | 15.1 | 2.4 |
| | 前上顎部平均示数 | 22.0 | 22.6 | 3.4 | 24.3 | 3.0 | 22.3 | 3.4 |
| | 鼻骨平均度 | 35.6 | 33.5 | 11.8 | 37.4 | 12.8 | 30.7 | 11.6 |
| 43/8 | 前上顎幅示数 | 82.1 | 75.7 | 3.5 | 73.8 | 3.2 | 76.2 | 3.5 |
| 46/45 | 側面示数 | 76.7 | 74.1 | 3.0 | 73.4 | 3.0 | 74.5 | 3.3 |
| 48/46 | ウルベウ上顎示数 | 53.0 | 53.5 | 3.0 | 55.6 | 2.8 | 51.2 | 3.4 |
| 48/46 | ウルベウ上顎示数 | 69.2 | 72.2 | 4.0 | 75.8 | 4.2 | 68.8 | 4.0 |
| 9/45 | 前歯頂面示数 | 72.2 | 69.2 | 3.2 | 70.8 | 3.2 | 68.2 | 2.8 |
| 45/8 | 頬骨頂面示数 | 102.3 | 97.7 | 3.8 | 94.3 | 3.6 | 99.1 | 4.1 |
| 50/44 | 眼窩四示数 | 15.9 | 17.3 | 1.9 | 17.3 | 1.8 | 18.8 | 2.1 |
| 52/51 | 眼窩示数 | 77.3 | 79.1 | 4.4 | 82.2 | 4.4 | 80.0 | 4.6 |
| 54/53 | 鼻示数 | 51.2 | 49.0 | 4.2 | 45.7 | 3.1 | 50.2 | 4.2 |
| 61/60 | 歯槽長軸示数 | 123.6 | 126.2 | 8.3 | 130.2 | 10.7 | 125.9 | 6.7 |
| 63/62 | 口蓋長軸示数 | 88.0 | 89.9 | 8.4 | 89.7 | 12.8 | 94.3 | 7.4 |
| 72 | 全顎面角 | 83.9 | 83.3 | 3.1 | 84.3 | 3.6 | 81.7 | 3.7 |
| 74 | 歯槽側面角 | 58.5 | 64.7 | 6.4 | 67.1 | 6.7 | 65.4 | 6.5 |
| 75 | 鼻骨側面角 | 57.6 | 63.3 | 6.2 | 61.9 | 5.7 | 64.8 | 7.6 |

図 168 本人骨の残存部位



頭骨は、前面観、左側面観、右側面観、後面観、上面観、下面観を示し、下顎骨は左側面観（図上）と上面観（図下）を、舌骨及び頸椎は上面観を示す。

図 169 第 2 主成分と第 3 主成分の主成分得点の散布図

図中の楕円は各集団の 1 標準偏差の範囲を示す。

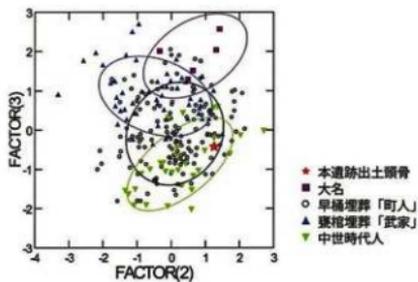
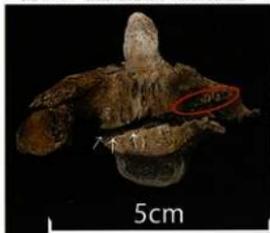


図 178 軸椎左後面の鋭利損傷



写真は軸椎の後面観であり、図中の矢印は平滑面の範囲を示し、図中赤丸は切り込みを示す。

図 179 第3頸椎の鋭利損傷



写真は第3頸椎の前面観であり、図中の矢印は平滑面の範囲を示す。

図 180 本人骨頭部の鋭利損傷



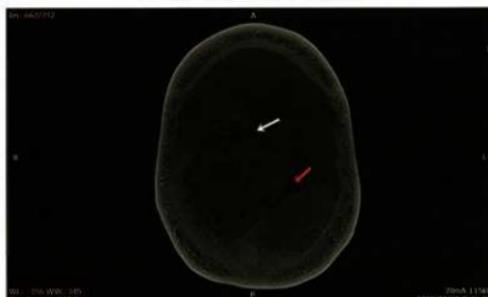
写真は下顎骨を前のかみ合わせて位置を調整して撮影したものである。図中矢印は損傷の位置と受けた方向を示している。

図 181 本人骨頭部の鋭利損傷



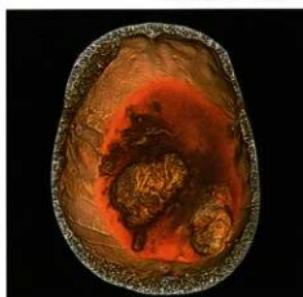
写真は軸椎と第3頸椎を関節させた状態での後面観である。図中矢印損傷の位置を受けた方向を示している。

図 182 本頭蓋内部のCT画像



写真上方が前方、写真左方が右側を示す。図中白矢印は前頭葉と右頭頂葉の間の中心溝を、図中赤矢印は大脳縦裂を示すと考えられる。

図 183 CT画像から立体的に構築したCG画像



写真上方が前方、写真左方が右側を示し、下方から頭蓋内腔を見た状態である。頭蓋内腔の頂上部に脳が広く固着している。

ところ、中段域西端の南北方向を指向する溝と3・4区で検出した大溝が図上で見事に一致した。この溝の方位は、中段域と下段域の段落ちのラインに直交しており、計画的に造成されたものの可能性があることを指摘しておきたいが、その意図するところは判然としれない。

また、第7面では溝を伴う小区画とその内に建物が見つかった。小区画は南北に長い短冊形を呈する。これに類する事例が、当センター3A調査区で検出されている。谷内で東西方向の道路に面して、南北方向に長い短冊形の区画が見つかった（図187）。東西道路の幅は側溝を含めておよそ3間である。この道路の続きと思われるものが当センター7B調査区北西隅で検出された溝である。道路側溝と考えられる溝で、上述の道路との関係性を復元すると図187のごとく東西方向からやや北向きに斜めに道路が敷設されているものと考えられ、概ね谷の中央を通る。第7面検出の短冊形の小区画や、第6面検出の建物群はこの推定道路に対して直交するように造られたものと考えられる。

さらに、第7面では中段域との際に井戸や土坑が集中する場所があり、屋地裏とも称すべきスペースが認められた。これに類する事例が、大阪府庁の北隣に位置する大阪府立大手前高校の改築時の発掘調査で見ついている。三の丸造成以前の遺構面で南北道に地口を開く短冊形の屋地があった（図184）。道の方位は北から東へ19度振れており、道幅は側溝を含めて三間（5.7m）。今次調査区と同様に東端には段も認め得る。

ここで注目したいのは、下面での土地利用である。道路に面して建物を建て、その背後に井戸やごみ穴を多数掘削する状況は、今次調査の第7面の状況に酷似する。これらは谷地形の中に造られており、一段低い場所に建物群が検出されている。おそらく、谷の中心に道を通し、その両側に屋地を設けたものであろう。その点でも、今次調査の成果とよく似る。そして、初期の町屋群は火事によって全焼したようで、その後再建された姿が上面である。かつて空き地だった場所に3棟が新築されている。下面ではごみ穴群があった段落ち際にも建物が建てられ、段の上にも建物が造られる。この状況は、今次調査区の第6面の状況に酷似する。また、下面から上面への土地利用の変化は、第7面から第6面への変化と共通する。大坂城二の丸西側に位置する場所において、共通した土地利用の仕方、並びに土地利用の変化が見て取れるの

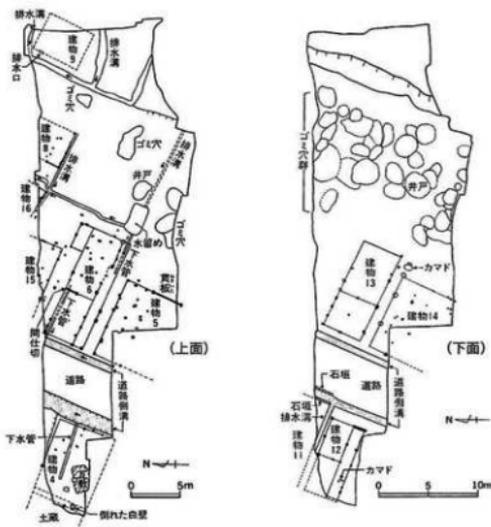


図184 三の丸下層の城下町（上面・下面）〔佐久間1989より〕

大坂城跡の発掘調査において、天正・文禄・慶長の年号が記された遺物が揃って出土したことは無く、大坂城跡を考究する上で貴重な調査成果となった。

大坂城三の丸の造成は、文献史学の成果により慶長3年6月から始まったとされる。今次調査では、三の丸造成に伴う盛土の下から慶長2年6月23日以後の紀年銘がある遺物は出土していない。三の丸造成盛土とした層準の妥当性が確認され、大坂城に関する歴史的事象と極めて整合的な成果と言えよう。なお、三の丸造成のために城の周辺に1万7千戸もの家が移転したとされる。今次調査成果から考えると、第6面の建物群がその一部に当たるものと推測される。

ところで、今次調査では第6面の建物群廃絶後、第5面とした段階を検出した。第6面の上に10～15cm程度の厚みで土壌層が覆っていたことから、立ち退き後すぐに盛土が成されたとは考えられない。立ち退きから三の丸造成までには、ある程度の時間差を考慮すべき状況である。慶長3年6月は、あくまでも大坂普請とされる三の丸の造成開始であり、家々の立ち退きは慶長2年段階からすでに始まっていた可能性もあろう。

人物名を記した木簡は、1・2区の両方で出土した。1区では623・628の木簡から、名字は無いが、「直五郎」、「ひ」、「宗三郎」という人物がいたことがわかる。さらに625・626の木簡から「毛利勘左衛門」「上野久介」という人物がいたことがわかる。

2区では三の丸造成に伴う盛土内から出土した。付近の表土を削り谷内を盛土造成したものと推測されることから、これらの木簡にある人物が調査地一帯にいた、もしくは何らかの関わりがある蓋然性が高い。1611～1614の木簡から「甚七」、「松川口兵衛カ」、「かみや十二郎」「いしの久たカ」「神兵左/神助左」という人物がいたことが明らかとなった。

これらの人物名の内、管見において知ることができたのは「毛利勘左衛門」である。桑田忠親氏によれば、『丹波小畠文書』に「毛勘左」宛の古田織部書状がある〔桑田1977〕。年号は無いが、古田織部が毛利勘左衛門からの音信に答え、贈物に謝し再会を期した内容である。桑田氏は毛利勘左衛門について、何びとかが明らかでないが、秀吉の直臣毛利勘八郎の親類筋のものではないかと推測されている。次いで、慶長の役の際の巨濟島海戦に関する「番船取申帳」にその名が見える〔津野2013〕。慶長2年7月22日付で海戦における日本側の戦果をまとめて注進したものである。該部分を記すと、

一 壱そう 毛利壱岐守/毛利豊前守 自身取申候
一 壱艘 毛利壱岐守内毛利勘左衛門取、
合式艘

とあり、毛利勘左衛門は毛利壱岐守の家臣であることがわかる。さらに、今福匡氏によれば、慶長5年7月の伏見城攻めにより、「毛利勢の損耗は激しく、勝永に従っていた家老毛利九左衛門、毛利勘左衛門などが討死にした。(中略)細川家の家老松井康之は「今度伏見にて森九左衛門、同勘左衛門、その他数多討死に致し候き、家中弱り正林なき旨候」と、毛利家中の様子を書いている。」とされる〔今福2016〕。この出来事については、〔白峰2018〕においても触れられている。

以上の事から、木簡に記された「毛利勘左衛門」は、豊前小倉城主の毛利壱岐守吉成の家臣である可能性が高い。木簡は豊臣前期面出土しており、慶長5年に討死にしたとされる史料とも矛盾はしない。以上のことから、豊臣前期において、当調査地付近のどこかに毛利壱岐守吉成の屋敷地があった可能性もあろう。さらに当地は、豊臣後期には佐竹義宣の屋敷地となっていることから、三の丸の造成以前と以後では、当地に屋敷を構えた大名が異なる可能性があることも指摘し得る。

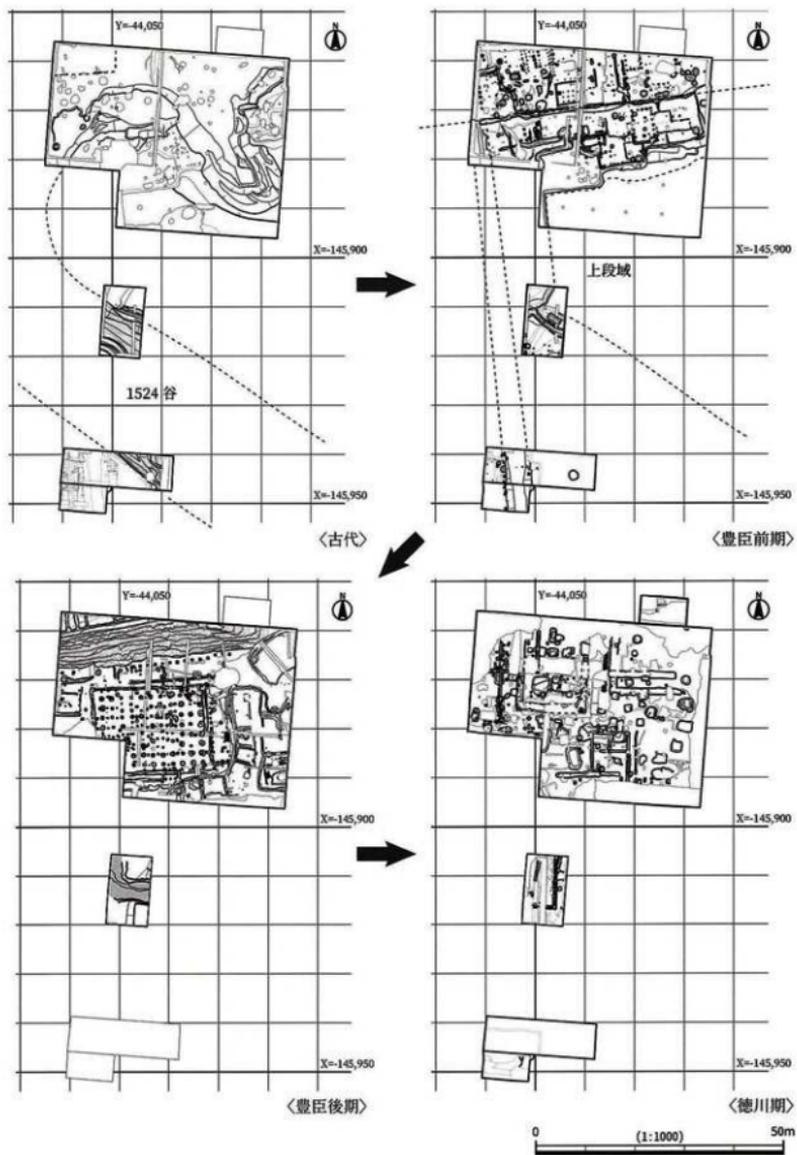


図 186 今次調査成果合成図

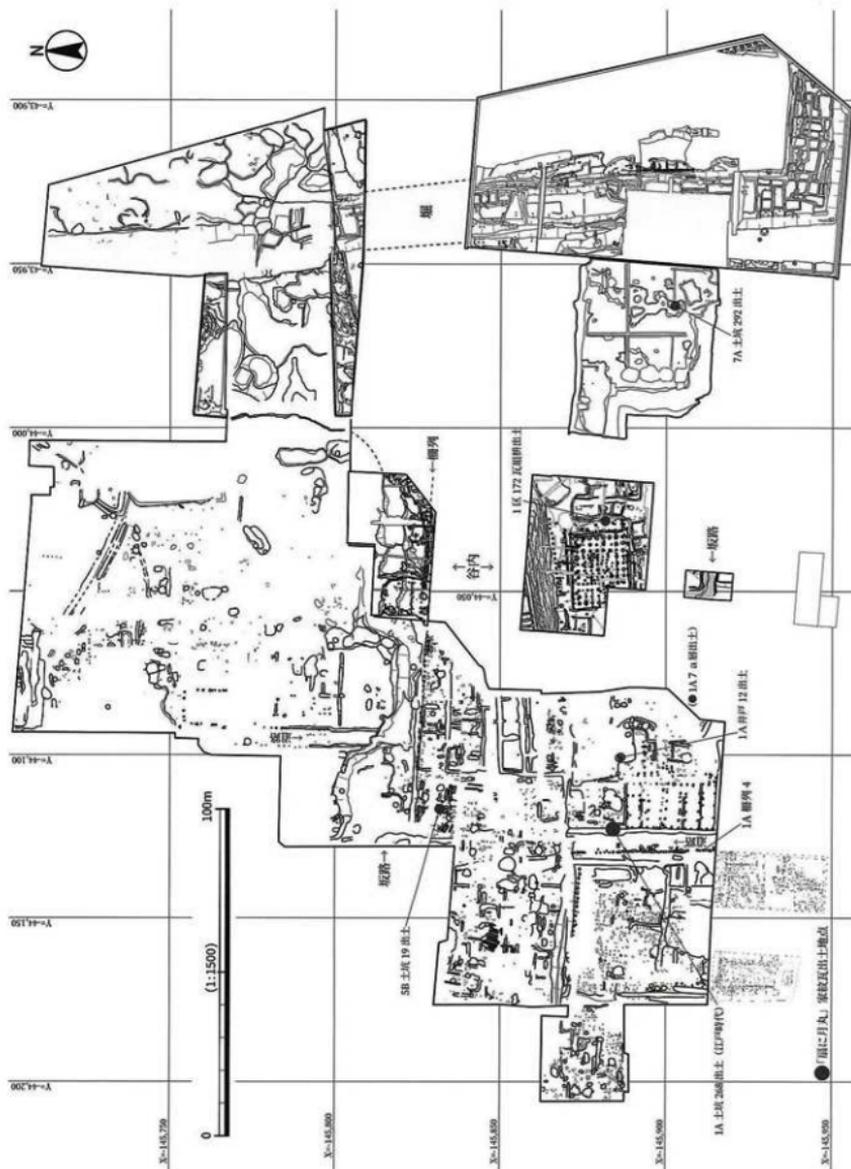


图 188 既往調査成果合成図（豊臣後期）

- 中世土器研究会編 1998 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 津野倫明 2013 「巨済島海戦に関する一注進状」『高知大学人文学部人間文化学科・人文科学研究』第 19 号
- 寺井誠 2004 「第 V 章 第 1 節 難波宮成立期における土地開発」『難波宮址の研究 第十二』(財)大阪市文化財協会
- 寺沢薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 49 冊
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2000 『大坂城出土の桃山陶磁 豊臣期のやきもの』
- 内藤昌 1959 「書院造遺構における柱間寸尺の基準単位について一問の建築的研究(18)一」『日本建築学会論文報告集 第 63 号』
- 内藤昌 1963 「主殿造の外形をもつ殿舎について」『日本建築学会論文報告集 第 89 号』
- 中川信作 1988 「大坂城跡の石山本願寺期から豊臣氏大坂城期にかけての国産陶磁器」『大坂城跡』III (財)大阪市文化財協会
- 中村博司 1989 「大坂城と城下町の終焉」『よみがえる中世』2 平凡社
- 中村博司 2004 「豊臣期大坂城の構造について」『大坂城一秀吉の大坂城縄張りをもとに』シンポジウム発表要旨
- 中村博司 2006 「慶長三〜五年の大坂城普請について一「三之丸築造」をめぐる諸問題一」『ヒストリア』第 198 号 大阪歴史学会
- 中村博司 2019 「豊臣政権の形成過程と大坂城」日本史研究叢刊 34 和泉書院
- 中村泰朗 2017 「京楽楽園」と京楽第六広間に関する考察『史学研究』第 295 号 広島史学研究会
- 根津美術館 1989 『桃山の茶陶』(財)根津美術館、(財)大阪市美術振興協会、日本経済新聞大阪本社
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- 前田洋司 2000 「豊臣氏大坂城の三ノ丸造成を巡って」(財)大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第 3 号
- 川前要 1988 「織豊系城下町の構造」『大坂城三の丸跡III』大手前女子大学史学研究所・大手前女子学園考古資料室
- 間壁忠彦 1991 『備前焼』考古学ライブラリー 60 ニューサイエンス社
- 松尾信裕 1994 「豊臣期大坂城の規模と構造一発掘調査から推定される豊臣期大坂城三ノ丸の範囲一」『大阪市文化財論集』(財)大阪市文化財協会
- 松本百合子 2018 「遺構龍文磁器一大阪出土の清朝青花と国産染付を中心に一」『大阪歴史博物館研究紀要 第 16 号』大阪歴史博物館
- 森毅 1992 「16 世紀後半から 17 世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第 9 (財)大阪市文化財協会
- 森毅 2000 「豊臣期大坂の美濃桃山陶」土岐市美濃陶磁歴史館『大坂城出土の桃山陶磁 豊臣期のやきもの』
- 矢部誠一郎 2017 『佐竹義宣と茶の湯』矢部誠一郎編『桃山・江戸時代初期の大大名の茶の湯』宮帯出版社
- 渡辺武 1982 「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について」岡本良一編『大坂城の諸研究』(日本城郭史研究叢書 8) 名著出版

〔発掘調査報告書〕

- 大手前女子大学史学研究所 1982 『大坂城三の丸跡Ⅰ』京橋口における発掘調査報告書
- 大手前女子大学史学研究所 1983 『大坂城三の丸跡Ⅱ』大手口における発掘調査報告書
- 大手前女子大学史学研究所 1988 『大坂城三の丸跡Ⅲ』大手口における発掘調査報告書その 2
- (財)大阪市文化財協会 1992 『難波宮址の研究』第 9
- (財)大阪市文化財協会 2000 『難波宮址の研究』第十一
- (財)大阪市文化財協会 2002 『大坂城跡』VI
- (財)大阪市文化財協会 2003 『大坂城跡』VII
- (財)大阪府文化財センター 2002 『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ』
- (財)大阪府文化財調査研究センター 2002 『大坂城跡Ⅱ』
- (財)大阪府文化財センター 2006 『大坂城跡Ⅲ』
- (公財)大阪府文化財センター 2015 『大坂城跡 4』
- (公財)大阪府文化財センター 2015 『大坂城跡 5』
- (公財)大阪府文化財センター 2016 『大坂城跡 6』
- (公財)大阪府文化財センター 2016 『大坂城跡 7』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004 『島羽宮跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-12
- 備前市教育委員会 2003 『伊予南大塚跡周辺宮跡群確認調査報告書Ⅰ』備前市埋蔵文化財調査報告 5

写真図版



1区 豊臣後期から徳川初期 第4面全景（西から現大阪城天守閣を望む）



1、1区・2区調査区配置状況（南から）



2、2区・3区調査区配置状況（北西から）



1、第9面 1501区画（西から）



2、第9面 1322井戸（北から）

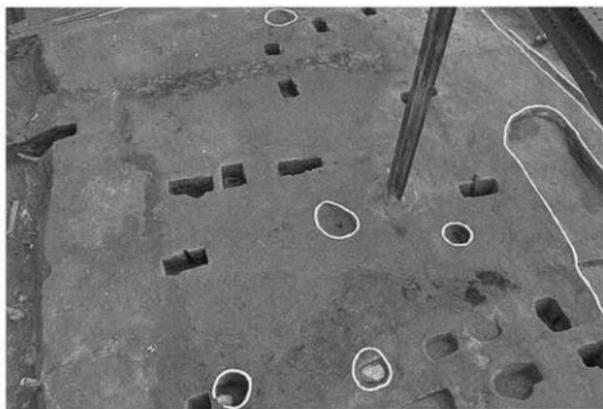


3、第9面 1322井戸 断面（東から）



4、第9面 動物足跡（南西から）

1、第7面 1149土坑
検出状況（西から）



2、第7面 1149土坑 全景（北西から）



3、第7面 1149土坑 断面（東から）

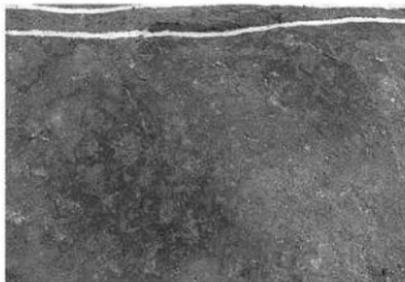




1、第6面 東半 全景(下が北)



2、第6面 西半 全景(下が北)



1、建物8 網代か 検出状況(北から)



2、建物8 985柱(西から)



3、建物8 987柱(北から)



4、建物8 991柱(西から)



5、建物8 988柱(北から)



6、建物8 986柱(西から)



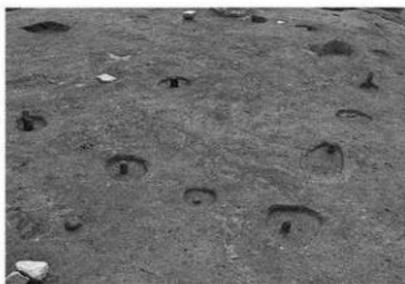
7、建物8 911暗渠検出時(北から)



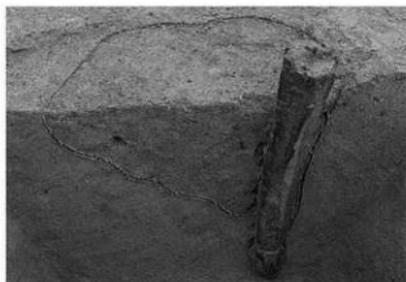
8、建物8 911暗渠 土管部分(北から)



1、建物7 東辺柱筋（北から）



2、建物7 北東隅部（北東から）



3、建物7 933柱穴（北から）



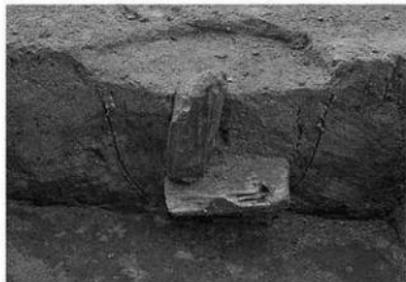
4、建物7 935柱穴（北から）



5、建物7 926柱穴（東から）



6、建物7 930柱穴（東から）

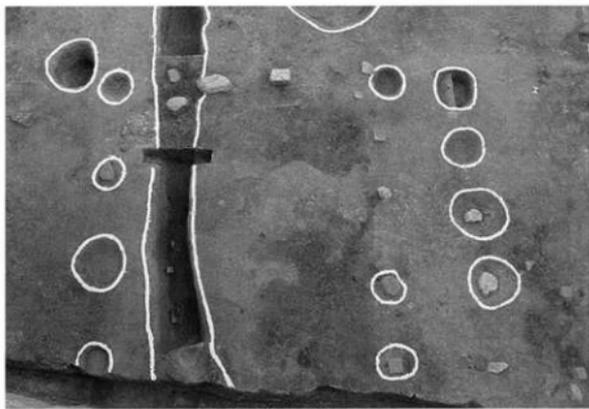


7、建物7 931柱穴（東から）

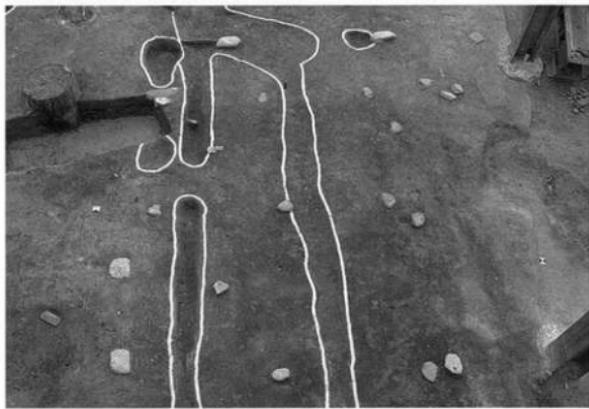


8、建物7 910土坑 断面（北から）

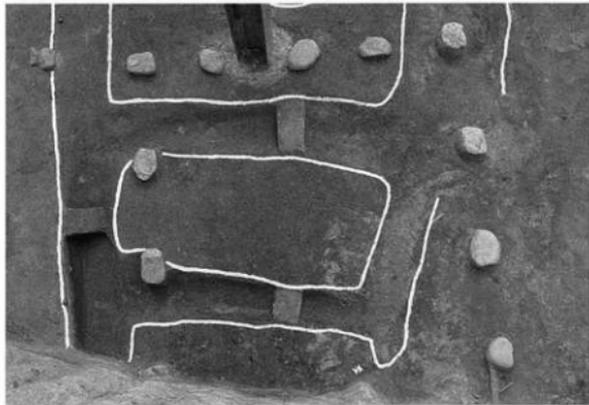
1、第6面 下段域 建物13
(北から)

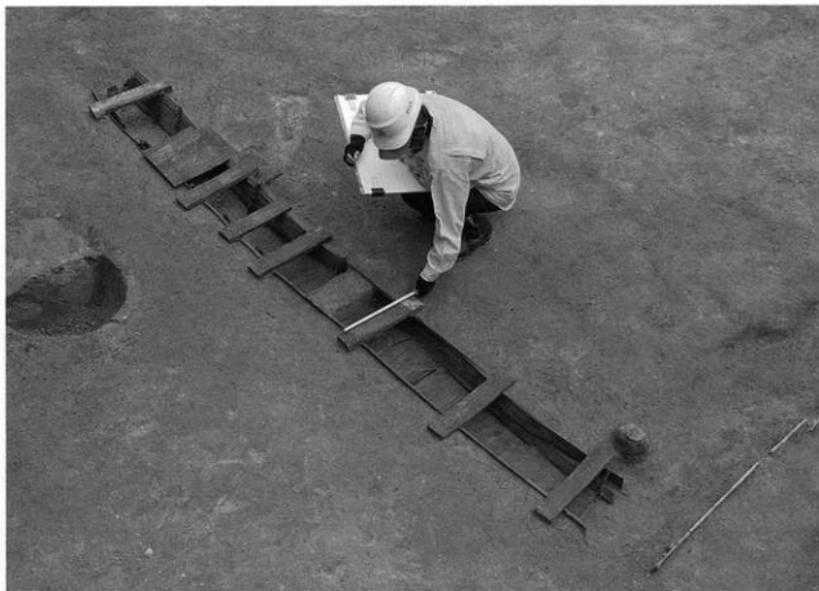


2、第6面 下段域 建物15
(北から)

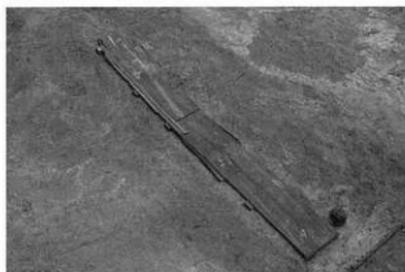


3、第6面 下段域 建物16
(北から)





1、第6面 中段城 576 暗渠（北東から）



2、576 暗渠 閉塞状況（北東から）



3、576 暗渠 取水口（南から）



4、第6面 中段城 687 溝（西から）



1、第6面 下段域 641 竈（西から）



2、第6面 下段域 686 土坑（東から）



3、第6面 下段域 750 土坑（西から）



4、第6面 下段域 657・687 溝合流部（北から）



5、第6面 下段域 887 土坑 断面（北から）



6、第6面 下段域 920 ビット（北から）



7、第6面 中段域 903 溝 土留め板（北から）



8、第6面 中段域 拡張部分 建物11（南東から）



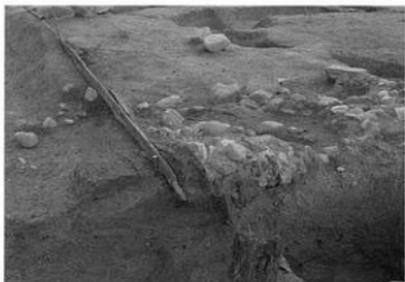
1、第4-2面 建物4・5 全景（左が北）



1、第4-2面 建物5 172 瓦組拵 (北西から)



2、第4-2面 建物4 442 瓦組拵 (南から)



3、第4-2面 建物4 354 仕切板 (北西から)



4、第4-2面 建物4 182 石敷き (北西から)



5、第4-2面 181 溝に架かる渡り板 (北西から)



6、第4-2面 181 溝 草鞋出土状況 (北から)



7、第4-2面 建物4 230 礎石抜き取り (南から)

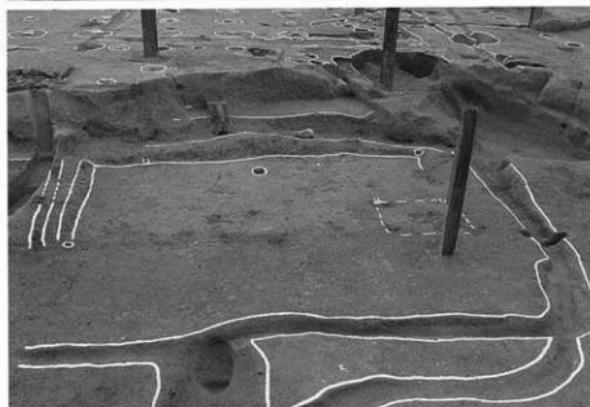


8、第4-2面 建物4 157 礎石抜き取り (南から)

1、第4-1面 全景
(南東から)



2、第4-1面 下段
区画6 (東から)



3、第4-1面 下段
区画4・5 (東から)





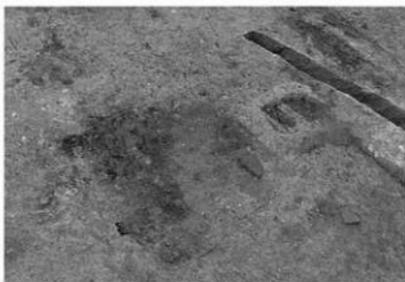
1、第4-1面 下段 区画1 鉄砲玉出土状況(南から)



2、第4-1面 下段 区画1 274滴遺物出土状況(南から)



3、第4-1面 下段 区画1 359瓦組施設(北から)



4、第4-1面 下段 区画3 363火処(南東から)



5、第4-1面 下段 区画5 355竈(南から)



6、第4-1面 下段 区画6 356柱(南から)



7、第4-1面 下段 区画6 412柱(東から)



8、第4-1面 下段 区画1 435柱(南から)



9、第4-1面 下段 区画2 430柱(西から)



10、第4-1面 下段 区画3 422柱(東から)



11、第4-1面 下段 区画4 418柱(東から)



1、第3面 第7層（炭灰層）検出状況（南から）



2、第3面 第7層（炭灰層）検出状況（東から）



3、第3面 第7層（炭灰層）検出状況（北から）



4、第3面 第7層（炭灰層）遺物出土状況（北から）



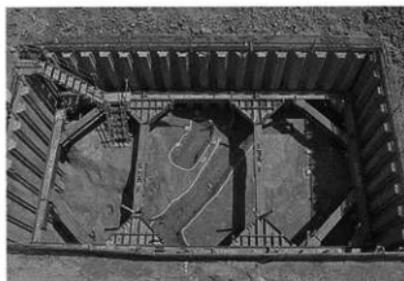
5、第3面 第7層（炭灰層）遺物出土状況（南西から）



1、1524 谷 (北から)



2、1524 谷 最深度 堆積状況 (東から)



3、第3面 全景 (西から)



4、第3面 建物 22 (北東から)



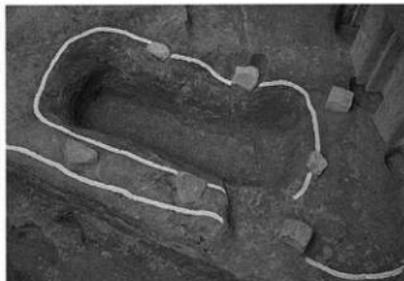
5、第3面 467 跡敷 (北から)



6、第3面 462 溝 (西から)



7、第3面 建物 21 と 463 土坑 埋没状況 (北西から)



8、第3面 建物 21 と 463 土坑 (南から)

1、第4面 1524 谷斜面
1527 集石遺構（西から）

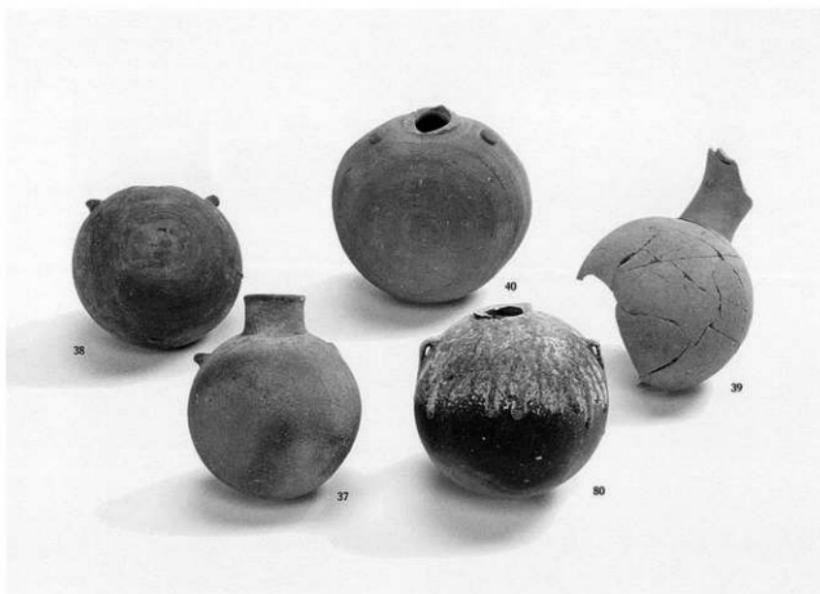


2、第3面 全景
（北から）



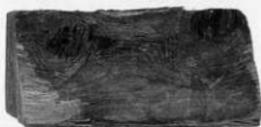
3、第3面 489 溝 断面
（北から）







82



83



84

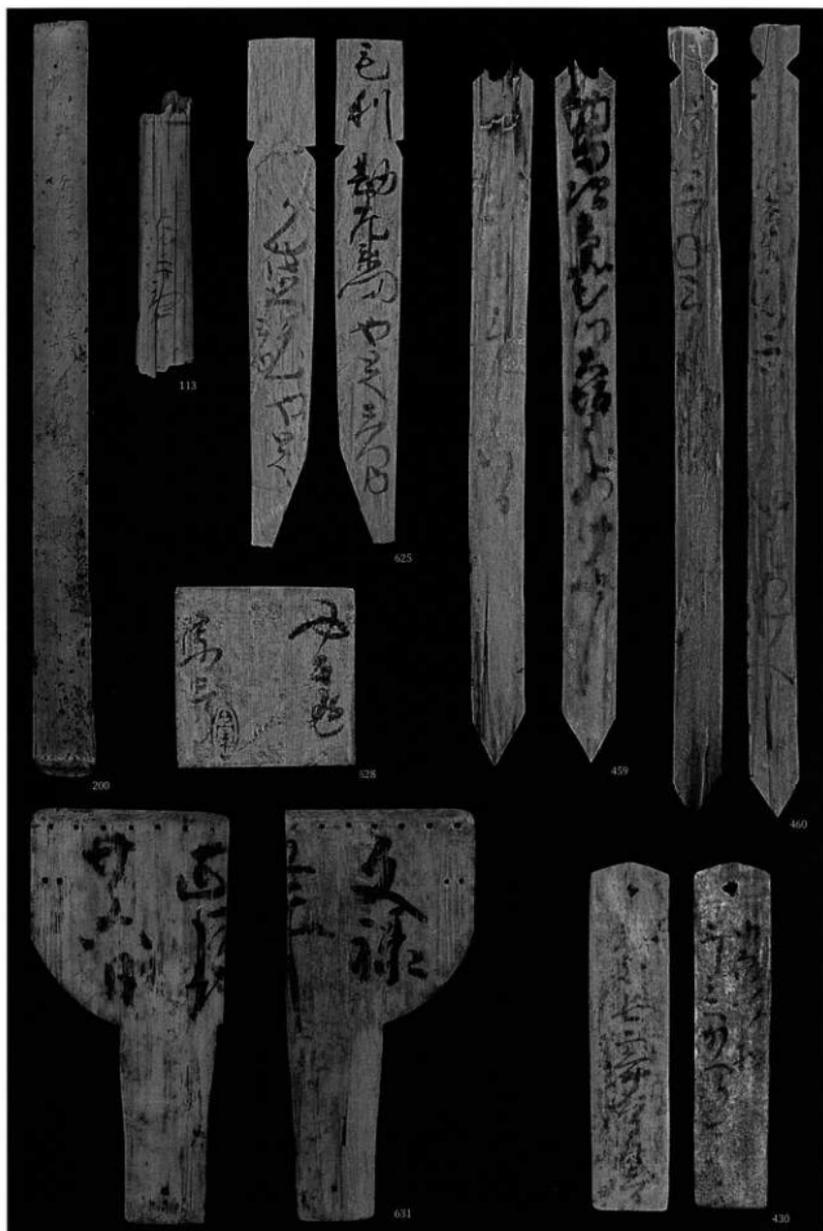


84



83

1区 豊臣前期 出土遺物2



報告書抄録

| ふりがな | おおさかじょうあと ちち | | | | | | |
|--------------------------------------|---|------------|-------------|-------------------------------------|---|--|----------------------------|
| 書名 | 大坂城跡8 | | | | | | |
| 副書名 | 大阪第6地方合同庁舎(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次数 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第307集 | | | | | | |
| 編著者名 | 鹿野 墨(編)、三好孝一、池田 研、丸山真史、坂上和弘 | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人 大阪府文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2021年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 緯度・経度 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡 番号 | | | | |
| おおさかじょうあと 大坂城跡 なにわのみやま 難波宮跡 | おおさかじょうあと 大坂府大坂市 ちゅうおうくおおてまえ 中央区大手前 ちゅう ばん 3丁3番10 | 27128 | 24 27 | 北緯 34°41'02" 東経 135°31'09" | 平成30年9月3日～ 14日、 平成30年11月1日 ～ 令和元年11月15日 | 1,958㎡ | 大阪第6地方 合同庁舎(仮 称)整備事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 大坂城跡 難波宮跡 | 谷 | 古墳時代 | 谷 | | 土師器・須恵器・陶質土器・ 埴輪 | | |
| | 谷 | 飛鳥時代 | 谷 | | 土師器・須恵器 | 北部九州産や東海産の須 恵器が出土 | |
| | 谷 | 奈良時代 | 谷 | | 土師器・須恵器・瓦 | 難波宮所用瓦、墨書土器 が出土 | |
| | 城郭 | 安土桃山 時代 | 建物跡・土坑・溝・井戸 | | 土器・陶磁器・木簡・木 製品・鉄製品・石製品・ 珊瑚・布・瓦・貝骨類 | 天正・文禄・慶長の紀年 銘をもつ木簡・竹材、人 名が記された木簡が多数 出土。 三の丸造成盛土を検出。 佐竹義宣の屋敷と考えら れる大型礎石建物を検出。 大坂の陣に伴う陣小屋を 検出。 | |
| 城郭 | 江戸時代 | 土坑・溝 | | 土器・陶磁器 | 大型の廃棄土坑を検出 | | |
| 要 約 | <p>古代では、三つの調査区において東西方向を指向する谷、北西-南東方向を指向する谷をそれぞれ検出した。谷内には古墳時代前期以降の遺物が多数包含されていた。</p> <p>豊臣前期では、谷内で三の丸造成に伴う盛土の下から、建物群を検出した。これらの建物は、一つの敷地に建てられたものと考えられ、武家地の様相を見せるものである。遺構・包含層から、天正・文禄・慶長の文字が記された木簡・竹材が出土し、慶長3年とされる三の丸造成の記録と見事に符合する調査成果があった。また、人名が書かれた木簡も出土しており、豊臣前期の武家地について新たな知見をもたらす成果があった。</p> <p>豊臣後期では、三の丸造成土の上で大型礎石建物を検出した。10間×7間半の大きさの建物で付近の遺構から扉に月丸紋の家紋瓦が出土した。これまでの調査で当地に佐竹義宣の屋敷地があったことが知られていたが、その屋敷と考えられる建物である。</p> | | | | | | |